



構築会

たより・会員名簿

2008 

目次 構築会たより2008

ふじ

■ 会長挨拶

福田 保 (C73)

03

■ 部門たより

社会基盤工学部門／鎌田 敏郎 (C教)

建築工学部門／多田 元英 (A80)

04

■ 特集「現場力」

現場力／友廣 康二 (C71)

改革×現場力／富士川 洋一 (C75)

財政改革を通して考える都市基盤整備について／山田 順一 (C83)

行政建築職の「現場力」とは／藤本 守彦 (A88)

近代建築をめぐる現場力／高岡 伸一 (A94)

途上国での復興支援にたずさわって／大野 拓也 (A96)

06

■ 名誉教授の先生からのおたより

16

喜寿を迎えて／樋木 亨

育水と地下水利用／村岡 浩爾

建設産業界の活性化に向けて／松井 保

仕事の後始末を通して社会貢献／西村 宣男

油絵／五十嵐 定義

趣味の延長 私の実験室／脇山 広三

黒石とボローニヤ／柏原 士郎

(雑感)あたりはすれ／橘 英三郎

近況報告／大野 義照

■ 名誉教授の先生からの一言メッセージ

23

鈴木 計夫

松井 保

ふじ

ふじ

ふじ

内閣府

ふじ

内閣府

■ 卒業生たより

24

- 卒業 50 年 クラス仲間の近況／金山 正吾 (C58)
卒業 50 年 昭和 33 年ごろ／野田 耕市 (A58)
卒業 40 年 卒後 40 年と構築会／香西 喜八郎 (A68)
卒業 30 年 30 年目の学生たち／後野 正雄 (C78)
卒業 30 年 卒業 30 年目の同窓会／吉村 英祐 (A78)
卒業 20 年 20 年を振り返って思うこと／鍋島 康之 (C88)
卒業 20 年 あれから 20 年／椎名 辰之 (A88)
卒業 10 年 10 年間の雑感／八丸 真 (C98)
卒業 10 年 10 年を振り返って「時間」について考える／橋本 武士 (A98)

■ 学生からのたより

34

- スポーツの秋／前田 瑛美
31 歳のモラトリアム その 2／田島 喜美恵
聴覚障害者の大学生活／高橋 保裕
感性を磨くこと／古賀 茉季
半年が過ぎて／吉浪 泰祐
レッツ異文化交流／神野 夏子
部活一色の時間／山本 康輔
ニュータウン育ち／若林 可奈
三回生になって／神田 真太郎
星に願いを／栗本 紗子
前期回想記／阪本 浩章
ハタチ／光田 めぐみ

■ 2008 年度構築会役員会報告

43

■ 構築会役員一覧

46

■ 支部役員一覧

47

■ 支部たより

48

大阪支部

愛知支部

東京支部

兵庫支部

広島支部

■ 構築会会則

53

■ 会員名簿

55

- 構築会会員数現況
- 計報報告
- 五十音別会員索引
- 特別会員名簿
- 正会員名簿
- 学生会員名簿
- 卒業生勤務先別索引

■ 教室たより

237

- 教職員構成
- 全寮歌・旧制浪速高等学校寮歌

■ 事務局たより

240

■ 業界案内

243

ごあいさつ



構築会会長
福田 保 (C73)

構築会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝で、ご活躍のこととお喜び申し上げます。

この度、構築会総会で会長に就任させていただきました。現在、大阪府都市整備部に勤務しております。この1年間、皆様方のご協力を得て、構築会の発展に努めてまいりたいと考えています。どうぞ、よろしくお願ひします。2008年度の「構築会たより」をお送りさせて頂くにあたり、一言、ご挨拶を申し上げます。

構築会は土木・建築が一同に会し、会員総数が約4,500名を超える大きな組織になってきました。また、学校、官庁、ゼネコン、コンサルタントをはじめ各界で活躍されている方々との連携や交流の面で、その強い繋がりで大きな役割を演じています。今後とも本部、各支部活動の充実や、各職域の会との連携を一層強めてまいりたいと存じます。この夏には、東京、兵庫の支部総会に出席させていただきましたが、それぞれ熱心な活動をされているのに心強く感じたところです。

大阪府庁でも「府庁構築会」として、OBを含め約210名の会員があり、現在では全庁各部局に亘り会員が在職し、庁内横断的な業務を進めるうえでは様々な面で助かることが多くなってきています。

さて、この構築会を運営していくうえでの課題ですが、1つ目は会計状況で、ここ数年、会員からの収入が減少し、繰越金を取り崩しながら事業費を削減している状況です。支部活動への補助や教室への助成、さらには2年毎の会員名簿の発行にも影響が出てきています。会員の皆様方には、この「構築会たより」がお手元に届きましたら、忘れずに会費をお納めいただきますようよろしくお願ひします。もし何期分か滞納されている方がおられましても、まずは今年度分だけでも納入をよろしくお願ひします。2つ目は最近若い人たちの構築会活動への参加が減少していることです。構築会でも、熱心に参画されている方々の少子高齢化の傾向が強いようです。各支部でも同様の状況とお聞きしました。このため大学とも連携を図り、学部生、院生時代から支部活動に参加してもらい、構築会の存在を意識してもらうよう取組んでいきたいと考えています。会員が実際に担当する現場などを見学してもらい土木・建築の役割を理解してもらうとともに、今後の就職を考える際の参考にしてもらえばと考えています。大学近辺の支部におかれでは、日程や費用の面でご配慮・ご協力をいただくようよろしくお願ひします。

これからは都市基盤整備は少子高齢化に伴う投資力の減少、高度経済成長時代を中心にストックしてきた大量の施設の良好な維持管理、さらには地球レベルでの環境問題への対応など、我々技術者が直面し、取り組んでいかなければならない重要な課題が山積しております。こういう時にこそ、産・学・官が一体となった構築会が受け持つ役割は大きなものがあると考えており、その存在感を世に示すとともに、一層の発展を願ってやまない次第です。

最後になりますが、会員の皆様方のご多幸とますますのご活躍を心からお祈りしてご挨拶とさせていただきます。

昨年の7月に赴任し阪大2年目となるこの4月から部門長を仰せつかっております。部門の活性化や教育・研究環境の改善を目指す上での課題は山積しており、部門長として確かに悩ましい場面も多いのですが、お陰さまで面白く楽しくやりがいのある毎日です。

部門の近況として、まずは教室メンバーの異動の話題から。本年3月に西田修三准教授が中辻啓二教授の後任としてみず工学領域の教授に昇任されました。4月から奈良敬教授が地球総合工学専攻の専攻長に、また、新田保次教授が工学研究科の副研究科長となられ、専攻や研究科の運営にご尽力いただいております。

統いて部門の学生の進路ですが、昨年度卒業の学部生39人中大学院進学者は26人（進学率は67%）で、部門としての就職者の総数は学部生と大学院生を

合わせて42名でした。内訳は、国家公務員4名、地方公務員5名、ゼネコン7名、鉄道会社5名、道路会社4名、残りは電力・鉄鋼・重工・コンサルなど、となっております。他大学の状況と比較しますと、阪大の社会基盤の土木系本流への就職比率は高い部類で、今後も引き続き、この路線を堅持すべく適切な就職指導を心がけて参りたいと存じております。あわせて先輩諸氏のご協力をよろしくお願いします。一方、社会基盤では、他大学からの学生も含めた修士への入学希望者数が伸び悩んでおり、昨年導入した推薦入試制度を有効活用するなど、優秀な学生の確保のために教室をあげて工夫を行っていきたいと考えております。

部門関連の今年度の行事の大きな目玉として、JABEE（日本技術者教育認定機構）受審があります。我々の提供する教育プログラムがJABEE基準を満足するものであるかどうかについて審査を受けるもの

□ 社会基盤工学部門の近況

で、数年前から部門をあげて準備を進めてきました。すでに7月末に自己点検書を提出し、現在はその審査期間中で、12月には審査員団が来校し実地審査が行われる予定です。準備状況は必ずしも十分とはいえないが、審査にあたっては部門の教員が一致団結することが重要であり、そういう意味では部門メンバー間での結束力を高める上で良い機会になるものと思います。外部からの客観的な評価を受けることで、教育体制や組織の改善につながればと期待しています。

上記に関連して、JABEEの基準に“教育プログラムに社会の要請を適切に取り込む仕組みを有すること”という要件があり、これに対応する形で構築会の先輩方を中心に選出した「教育システムアドバイザー」制度を7月に発足させました。年2回の連絡会議を開催し、社会が求める人材を育成するために部門の教育に何を取り入れるべきかといった議論を交わしていく予定にしています。



社会基盤工学部門長
鎌田 敏郎 (C 教)

その他、産学連携のトピックスを一つ。今年の3月、工学研究科と西日本高速道路㈱との間で、研究連携の推進に関する協定が締結されました。現在、奈良教授を中心とした当部門のメンバーと先方の代表メンバーとで構成する連携推進会議を設け、いわゆる寄附講座の設置を見据えた種々の検討が行われています。この枠の中では、一般的な個別の共同研究の実施に加えて、工学研究科内でひらく別分野の方にも研究に参画いただけるようフォーラムを開催することで、ニーズとシーズのマッチングを行う新しい試みなどが構想段階にあり、今後の進展が楽しみです。

一の6月に部門のホームページが更新されました。
二若手の先生方を中心に魅力的なTOPページを完成させていただきました。是非一度覗いてみていただけませんか？

社会基盤工学部門HPアドレス：
<http://www.civil.eng.osaka-u.ac.jp/Apli/index.php>

まずは恒例により、人事異動について報告します。本年1月に山中俊夫准教授が教授に、甲谷寿史講師が准教授に昇任され、建築環境工学の分野が充実しました。また、本年3月末をもって大野義照教授と甲津功夫教授が定年退職され、名誉教授の称号を授与されました。両先生のご功労に対して心より感謝申し上げます。この代替わりの節目に、建築構造学講座内の各領域の研究内容が外から見て分かりやすくなるよう、名称を「建築地震地盤学領域」、「コンクリート系構造学領域」、「鉄骨系構造学領域」に変更しました。担当教授には、建築地震地盤学領域に宮本裕司先生（前鹿島建設（株）小堀研究室）を、コンクリート系構造学領域に倉本洋先生（前豊橋技術科学大学准教授）を新たにお迎えし、いずれも4月に着任されました。両先生とも、当該分野において日本を代表する研究者であり、阪大建築構造のプレゼンスを今後さらに高めていただけるものと期待しています。また、伊丹康二先生（前

豊中市とよなか都市創造研究所研究員）が建築・都市人間工学領域の助教に、桃井良尚先生（前東京工芸大学特別研究員）が建築・都市環境工学領域の助教に4月に着任されました。両先生は本学の博士後期課程を修了された後に外部の研究機関で活躍してこられ、新しい空気がもたらされることで建築工学部門が活性化されることと期待しております。その後、本年9月に桑原進先生が鉄骨系構造学領域の准教授に着任されました。先生は2005年4月に本学の学内講師から京都工芸織維大学の助教授に栄転されておりましたが、縁あって古巣に戻られる結果となりました。

今年は褒章・受賞の嬉しいニュースがいくつかござります。本学名誉教授の五十嵐定義先生には永年のご功績が認められ、本年春の叙勲として「瑞宝中綬章」を授与されました。5月に伝達式と拝謁式にご夫婦で出席された由に存じます。また、甲谷寿史准教授

□ 建築工学部門の近況

が日本建築学会奨励賞を受賞され、大野義照名誉教授と岸本一蔵准教授が卒業生と連名で書かれた論文に対してプレストレストコンクリート技術協会賞（論文賞）を受賞されました。建築工学部門の一員として鼻を高くさせていただきました。

昨年度の卒業生の動向についてご報告します。2008年3月に建築工学コースを卒業した学部生は40(1)名です。（ ）内は留学生で内数を示す。その内、就職した者が4名、阪大大学院・建築工学コースに進学した者が30(1)名、他大学または他専攻の大学院に進学した者が6名でした。また、現在のM1生の内、他大学からの入学生が3(1)名でした。最近は9割程度が大学院に進学するのが常になってきました。また、他大学との学生の往来が特に活発になって参りました。一方、昨年度の大学院前期課程修了生は39(6)名で、ほぼ全員が就職し、留学生の1名だけが博士後期課程に進学しました。博士後期課程の学生を充実させるこ



建築工学部門長
多田 元英 (A80)

とは大学内で特に求められていることであり、社会人の身分を継続したままの入学も認められていますので、博士号の取得にメリットを感じられる方は、是非とも我々に打診していただければと思います。就職の話しが最後になってしましましたが、学生の就職状況は極めて良好になっております。これも卒業生各位のご活躍のおかげと感謝しております。ただ、あまりに状況が良すぎて、一部の人気企業に学生が偏って就職する傾向も伺え、少し危惧しているところでもあります。

以上、建築工学部門の近況報告とさせていただきます。卒業生の皆様の益々のご活躍とご健康を、心からお祈り申し上げます。

市原・福岡市（貢献指標）が総合得点で1位となりました。また、土木学会賞（土木技術大賞）を受賞したほか、日本建築学会賞（土木部門）を受賞するなど、多くの賞を獲得しています。

現場力

現場勤務から離れて久しいので、普段考えている「現場力」というものについて述べさせていただきます。

建設会社にとって「現場」というのは、社会からの信用のもと人々が生活を営み産業が生産を行うに必要不可欠な、社会資本整備の一翼を担う「場」であると言えます。また、別の側面としては、会社に利益をもたらす収益の源、極端に言うと建設会社にとっての生命線ともいえる「場」でもあります。したがって「現場」は、会社のもてる全ての力を集約する「場」であるべきで、「現場力」というのは「会社の総合力」と言い換えることができるのではないでしょうか。

「会社の総合力」は、いまでもなく会社員一人一人の地道な努力の総和で成り立っていますので、各員の心意気というものの高低が総合力に大きく影響します。また、影響がすぐに表れるものもありますが、大抵は少し時間を経てから表れてくるものだと思います。これは多くの人の努力が総和となっていくプロセスに、どうしても一定の時間を要するからでしょう。したがって、心意気をできるだけいつも高めておくことが重要で、そのための環境整備が「現場力」を維持するためには非常に重要であると思えてなりません。

今土木業界は過去にない大きな曲がり角にさしかかっており、環境を整えるといつても将来を見据えたしっかりとした考え方をもって物事を決めていかないと、時代に即した環境作りは成し得ないと思います。社会的要請をしっかりと受け止めつつ、社員各自がやる気の出る環境をつくることがコンセプトであると思います。では、具体的にどういうものが環境整備につながるかを次に考えてみたいと思います。

企業である以上、社会的責任に応えた上で利潤を追求するのは当然であり、収益源である現場から公正な利益を得るために適正な金額で受注することがまず第一の条件になると思います。最近は、総合評価方式による発注が多くなってきており、このような状況で目標を達成するためには、発注者のニーズを的確に捉えた上で、長い経験から得られた知恵や工夫といったものを提案に活かせるようにしなければなりません。多くのノウハウを時代のニーズに合わせて常に新鮮な状態にしておく、すなわち提案に反映できるようにしておくには、技術の伝承・ノウハウの蓄積が



株大林組

友 廣 康 二 (C71)

重要です。

また、現代のように高度な課題に迅速な対応が求められる時代には、現場単位での対応ではもはや限界に達しており、常設部門と現場の協働、つまり全社一丸になって対応していくことが必要になってきています。このような観点に立ち適正な年齢構成をも勘案した効率的で迅速に対応することのできる組織作りをしていかなくてはなりません。

以上は、組織のメカニズムあるいは仕組みですが、それを動かすためにはエネルギーが必要です。会社組織の活力源は各人のハートであると思います。自分自身が社会資本整備の一端を担っているという誇り、ひいては現場への愛着、愛情を持つことが重要です。熱いハートというエネルギーによって、効率的で弾力性に富んだ組織が動いてはじめて建設会社本来の機能が十分に發揮されるものと信じております。

そしてもうひとつ企業にとってなくてはならないものがあります。それは信用力です。信用は特別な活動によって得られるものではなく、不断の誠実な取り組み姿勢からこそしづつ形成され、やがて大きく育っていくものです。このかけがえのない信用というものを得ることによって社会から認められ仕事を任せさせていただけるようになり、それがやる気につながっていき、「現場力」がアップしていくという「正の連鎖」になっていくものと確信しております。

今まで「現場力」について思うことを書いてきましたが、今の土木業界は「現場力」の源泉である各自の心意気、活力というものが容易に保てない状況まで落込んでいます。今後は現場力の強い会社が、当然生き残っていくでしょうが、業界として将来に向けての技術開発あるいは人材の育成といったものが非常に厳しい状況にあるのも事実です。インフラ整備の必要性を今一度広く国民の皆様に理解していただき、また今話題の入札制度にも更なる改善を加えない限り、しばらくは混沌としたこの状況が続くであろうし、世界に飛躍していく展望が開けてこないのでしょうか。抜本的な対策について有識者から知恵を頂き、これを建設に携わる者みんなで考え、土木業界が再び活力に満ちた魅力ある姿を取り戻すことを願ってやみません。

改革×現場力



株式会社建設技術研究所
大阪本社
総合プロジェクト室 室長
富士川 洋一 (C75)

「(構造) 改革なくして、成長なし」は、小泉元首相のキャッチフレーズですが、公共事業削減、入札・契約制度の見直し途上での低入札問題等々、加えて建設業界、発注先の不祥事が相次ぐ中、「外的条件に対して、しなやかに対応できる組織を、いかに改革しながら戦略を立て継続的に維持・発展していくのか?」、が今問われています。これに対する特効薬はありませんが、少なくとも「現場力が改革のエンジン」であることは、大筋において同意いただけるのではないかと思っています。

具体的な「現場力」とは、「戦略を軌道修正しながら遂行する組織能力」、すなわち、「企業のオペレーション力」と定義されます。このオペレーション力は、正しいこと（ビジョン作成=尤も妥当性の高い改革目標）にむかって、正しいことを地道にやりつづける強い意思と能力が必要で、後者の方がはるかに難易度は高い。したがって実効性を担保するためにも下図のような逆ピラミッドの発想が必要です。現場力については、数多くの専門書も発行されており、詳細はそれらを参照されることをお薦めしますが、本稿では、筆者の所属部門での現場力の一例をとりあげたいと思います。

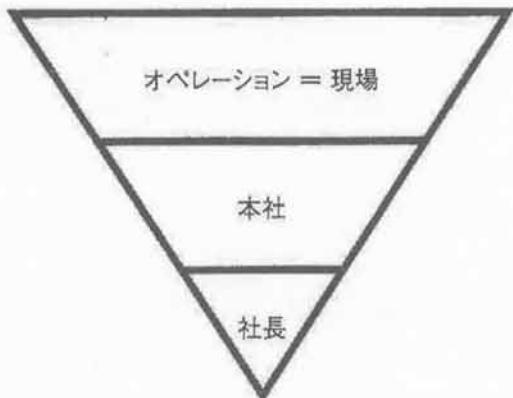


図-1 経営の実効性—逆ピラミッド (参考文献1)

建設コンサルタント業界も含め、建設業界をとりまく状況が非常に厳しいことは誰もが認めていますが、現状を正しく認識した上でビジョンを立て、改革を実行していくことが強く求められています。のために、それぞれの企業の強みを活かした、オンリーワンの企業を作り上げるためのブレーク・スルーとして、「従来の環境を否定した、新たな改革なくして、再生なし」の道は避けて通れない、と思います。

建設コンサルタント業界において、当初、発注者の作業のお手伝い（技能提供型）から始まり、ほぼ50年が過ぎた現在では、真のコンサルティング・エンジニア（C.E.）、さらにはプロフェッショナル・エンジニア（P.E.）へと発展してきました。これは、1990年代前半になって会計法による入札金額のみによる契約制度に対して、プロポーザル方式による契約制度が導入され、様々な試行の上、技術力・業務執行能力等、さらに金額も加味した総合評価方式などを加えた新しい契約制度へと大きく発展してきたことも一因です。

この業務受注から業務実施、さらに納品後のアフター・ケアにいたるまでのチェーンをその時々の変化に応じて総合的に対応できる組織×現場力（=組織能力）として、当室ができる6年目となります。災害対応、河川整備計画、流域委員会、廃棄物処理等々、社内横断組織としての現場力発現（品質、コスト、スピード、持続性等二律背反的な目標を同時に達成）に追われている毎日ですが、これらのプロジェクト達成後のチームでの感動の共有は、何物にも代え難い喜びです。

土木技術者の使命は、インフラストラクチャーを整備し、運営、維持、管理することであり、作家の「塩野七生」は、ローマ人を「インフラの父」であり、「人間が人間らしい仕事を生活を送るために必要な大事業」がローマ人が考えたインフラストラクチャーの整備であると述べています。そ

ういう視点でみれば、事業費が減少とは言え、今後、我々がなすべきことが自ずと明確にならうかと思います。

土木に関するサポーターや優秀な評論家によって、マスコミも含め、国民の皆さんに、建設業界・土木技術者を正しく理解していただくために、発注者、建設業者・メーカー、コンサルタント、研究機関の技術者の全体最適の追求のために、①「誠実性、正直性、真実性」に支えられた技術者の育成と目的の明確化、②多様性にもとづいた現場力の強化が、今こそ求められています。それこそが、土木技術者（インフラ・エンジニア）がねばり強く、社会的認知や尊敬に得るための道筋ではないでしょうか？人は、期待される程度に応じて自己実現努力を行い、達成感を得るもので。

最後に、私事ですが日本技術士会誕生の年（1951）に生まれ、まもなく来る定年に備え、現場力の奥深さを痛感しています。次世代へ引き継ぐべきインフラ・エンジニアとしての私のメッセージは、①海外も見据えた本もののプロフェッショナルエンジニアになること、②最後にものを言うのは、健全な心と体力の維持と感動を共有できる仲間、この2つです。

（参考文献）

- 1) 現場力を鍛える「強い現場」をつくる7つの条件 遠藤功 東洋経済新報社 2004
- 2) 図解でわかる現場力80のポイント 宇野彰 日刊工業新聞社 2007
- 3) インフラのデザイナー 建設コンサルタントの役割とは 石井弓夫 山海堂 2003
- 4) インフラコンサルタント物語 清野茂次 日刊建設通信新聞社 2008

次回目×革新

泉小川は、この分野で、アドバイザリーグループを組織するなどして、日々、様々な問題を抱え、解決するための手を貸す。泉小川は、自分の専門分野である「土木工学」や「環境工学」などの知識を活用しながら、問題を解決していく。また、他の専門家や、建設現場の現場監督、技術者とも連携し、協力して問題を解決していく。泉小川は、常に新しい技術や方法を追求し、それを実践していくことで、より良い結果を出すことを目指している。



（参考文献）アドバイザリーグループによる問題解決プロセス

財政改革を通して考える 都市基盤整備について

(C83) 真木 伸



大阪府都市整備部事業管理室
参事
山田順一(C83)

地方自治体の中でも特に財政状況が悪い大阪府では、平成8年度以降数次にわたる行財政改革を実施していますが、その後も構造的な支出の増加や景気対策のための財政支出などにより、平成19年度末において起債残額が5兆円に達するまでになっておりました。今年2月、橋下知事が就任と同時に「財政非常事態」を宣言し、維新プログラムの策定により、さらなる歳出削減を図っているところであるというのは、知事の知名度もあってかなり多くの方に認識されるようになっています。

一方、府下の都市基盤施設の整備状況を見ますと、都市計画道路の整備率は6割にも達しておらず、治水、耐震などの防災対策なども到底十分とはいえません。大阪府が総合計画に基づき行っている平成19年度「府民意識調査」では、大阪が災害に強いと思っている府民の割合がわずかに約3割で、大気や川がきれいになったと感じる府民の割合も2~3割程度にとどまっています。都市基盤整備の進捗状況についておよそ数字ではござらない方の意識が、整備状況と符合することは都市基盤がそれだけ生活に身近なものだということだと思います。

思い返すと昭和60年の入庁時は、ちょうど関西国際空港が泉州沖で本格的に動き始めたころでした。りんくうタウンを始めとして関空連携業務をかなり経験しましたが、現在ではほぼ整備が終わり、工事中に何度も訪れた関西国際空港からの海外旅行も経験できましたし、さらにはいつの間にか大阪府の面積は香川県を抜いて全国最小ではなくなってしまうほど、この20年余りは、大きく大阪が変化する様子をかなり身近に体感できました。こうした大型のプロジェクトでなくとも、土木事業は、街に大きな変化を与えることがほとんどです。5年ほど前に担当した道路事業は、ちょうど1kmの区間の暫定供用を迎えるとこ

ろでしたが、供用直後から1万台を超える交通量がありました。完成時の安心感、達成感のほかにも、供用後の光景が今後相当な長期間継続するだろうと思うと大変感慨深いものでした。

国や自治体の財政状況の悪化は公共事業への投資余力を大きく縮小させています。都市インフラである土木施設は、産業活動の下支えや、生活環境の改善など人の暮らしの中心に位置することになりますが、その一方で、整備に要した起債の償還、維持管理や老朽化による更新費など社会に対して経済的な負担を強制してしまいます。

最近のダム建設の賛否に関する報道などでは、代替策の事業費などには言及がないまま、投資額の大きさにのみを問題視して、あたかも事業全体を大きな無駄であるかのように表現していることもよく見受けられますが、財政状況の悪化が、こうした声を大きくしている要因のひとつだと感じます。

公共事業により全ての都市インフラを整備できる状況ではなくなりつつあるのかも知れません。与えられる財政的な条件で今後の長期的なまちづくりをどのようにしていくべきか、どういった社会ニーズにどの程度対応できるか、どうすれば可能なのか、あるいは何ができる何をするべきでないのかなどについて、わかりやすく整理・表現し、発信していくことが今後は極めて重要な認識しています。

行政建築職の「現場力」とは



神戸市都市計画総局

建築課

藤本守彦 (A88)

今回のテーマの「現場力」—ここで言う「現場」はもちろん「工事現場」ではなく、「仕事の第一線」ということですが、「現場力」とは発生する問題を予見・発見し、解決するといった能力が企画部門などではなく、最先端の現場が持っていることとされています。決められたことをこなすだけでなく、常に問題意識を持って改善ができる現場こそ「強い現場」であり、社会の動きが激しい現代であればこそ、単に技術が高いというだけでなく、「いま求められているのは何か」を的確につかんで実行できることが最先端の現場に求められているということかと思います。

さて今回「現場力」というテーマを与えられましたが、その趣旨には「地域住民の声をくみあげ、地域に配慮した計画、地域住民を考えた施工上の工夫」といった地域との関わりの中で「現場での経験を通じた土木、建築の意義」とありました。私のような自治体建築職員にとっては今回のテーマは日常業務そのものと言えます。

では行政における「現場力」とは何か? いうまでも無く自治体の仕事は法律の枠組みと税金を使った限られた予算の中で執行されるわけですが、常に「現場」において地域住民や公共建物の利用者の要望を実現するといった使命を帯びています。

いま「営繕部署」の周辺においては、入札・契約関連業務の制度改革、工事の品質確保のための新たな制度、法手続きの厳格化など、毎年のようにいいものを作るための仕組みができていますが、同時に技術的な業務への関与が手薄になっているような気がします。厳しい設計期間、工期といった時間的な制約がかつてないほど限界に来ており、じっくりと取り組むことなく、ものづくりがなされているのではないかと危惧さえされます。そのような状況下ではありますが、今回のテーマに合致するものとして、神戸市で現在行っ

ている地域の集会施設の改修工事の例があげられます。

各小学校区にある地域の集会施設において、地域団体自らが活動内容に応じて必要な改修内容を煮詰めたものをもとに市が工事を発注するというものです。地域の要望を地域自ら優先順位をつけて選択した上で実現されています。小さな工事ですが、かつてのように役所が画一的に決めたものだけでは本当に求められている行政サービスが出来なくなってきたとも見て取れます。我々建築職員には施設の管理運営者、設計事務所、施工業者との間を調整する中で、その都度発生する課題に対応するために技術力とは別の調整能力としての「現場力」が求められることとなります。

一方、「まちづくり」という分野に関して言えば、阪神大震災の復興が一段落した10年ほど前から区役所に建築職が少しずつ配属されるようになり、いつの間にか延べ50名以上の職員が区役所で勤務しているという状況です。自治体以外の方には分かりにくいかと思いますが、これは一昔前では全く予想もできませんでした。いまでは若手の建築職員の中では人気の花形職場となり、異動希望が集中している感さえあります。まちづくりコンサルタント的な仕事、言い換えば技術的・専門的な仕事よりも総合的な調整力が注目されているようです。ここは地域住民に接する最前線としてまさに「現場力」が試される職場であり、この傾向はこれから自治体建築職員のひとつ方向性を示しているかと思います。

ところで、総合的調整能力が重要視される中で、ややもすると専門的な技術力が軽視されがちになっていたところに起こったのが「姉歯事件」でした。事件をきっかけに法手続きの厳格化や二重チェックなどで対応がなされようとしていますが、確認申請に長期間を要し、ついには景気問

近代建築をめぐる現場力



高岡伸一 (A94)

大阪の都心部には、明治から昭和の初めにかけて建てられた近代建築が数多く残っています。中央公会堂や中之島図書館のような公共施設だけでなく、民間が所有する小規模なビルが大阪市内には点在しており、近年その保存・活用に対する関心が高まりをみせています。現代の建築ではみられない凝った装飾や、味わいのある古びた雰囲気に惹かれ、レストランやカフェ、洋菓子店などが次々と近代建築にオープンし、レトロビルにオフィスを構えたいと、近代建築のテナントビルに人気が集まっています。一般情報誌などで特集が組まれることも多く、昨年上梓したガイドブック『大大阪モダン建築』が好調な売れ行きをみせていることからも、その関心の広がりが伺えます。ここでは最近の大阪における近代建築をめぐるさまざまな動きを、現場に携わる者のひとりとして紹介したいと思います。

■市民の現場力

「大オオサカまち基盤」という、いささか大仰な名称をもつ市民グループがあります。2004年、次々と解体されていく近代建築を目の当たりにし、危機感を感じた市民が集まって活動をスタートさせました。私もメンバーの一人ですが、建築関係者に限らず、多彩な職業・世代の人たちによって構成されています。その活動スタイルは従来の保存運動などとは異なるユニークなもので、自分たちが楽しむことをまず第一に、市民レベルでの近代建築との関わりを模索しています。例えばほぼ廃屋と化した近代建築を借りて期間限定のカフェやフリーマーケットを開いたり、ある近代建築の屋上を会場にピアガーデンを催したり、あるいは近代建築をモチーフにしたTシャツをつくりてみたり。とりわけオーナーという存在にこれ

まで光が当たらなかったことを疑問に感じ、その思いや苦労を伺うべく開催した「近代建築オーナーサミット」は大きな話題となりました。これらの活動は社会的な意義や責務というよりは、どちらかといえば気の合う仲間が週末に集まって楽しむレジャーの感覚に近いものです。それは単なる消費活動に飽き足らない都市生活者が近代建築をテーマに自ら編み出した、都市における「遊び」のオルタナティブといえると思います。実際大阪の都心部では近代建築に限らず、多くの都市生活者がそれぞれの関心に応じてグループをつくり、街を少しでも知りたい・楽しみたいというモチベーションのもと、さまざまな活動を展開しています。

■アートの現場力

近代建築の活用に関して近年特筆すべきもののひとつに、アートとの結びつきがあげられます。昔から近代建築にはアートギャラリーが多いという傾向がありますが、ここで紹介したいのは通常の利用形態の枠を超えた、アートと建築のより直接的な結びつきです。私が現在所属する大阪市立大学の都市研究プラザでは、近代建築の創造的活用による都市の活性化をテーマに、2006年から毎年「船場建築祭」という実験イベントを開催してきました。大阪の中心市街地である船場をフィールドに、例えば1923年に建てられた伏見ビルではアーティストに依頼し、伏見ビルの空間や歴史からインスピレーションを得て、建築そのものをアート化するような作品を制作してもらいました。また1927年に建てられた芝川ビルでは建物全体を舞台に見立て、アジア舞踊のダンサーにパフォーマンスを披露してもらいました。それは演者が階段を上り下りし、廊下を走り抜けてい

く後を観客が追いかけるという、不思議な演劇空間を現出させる試みでした。その成果を活かすようなかたちで、大阪府現代美術センターが開催する「大阪・アート・カレイドスコープ」では、2007年から多くの近代建築でサイトスペシフィックなアートを制作・展示するようになりました。また大阪を拠点に活動するNPO法人ダンスボックスが、近代建築やパブリックスペースを舞台としたダンス公演を増やしつつあるなど、その後ひろがりをみせています。このような試みは道路や公園に既成の美術作品を設置するといったこれまでのパブリックアートとは異なり、都市そのものをアートの対象とするという意味でより直接的かつインパクトがあり、都市の魅力を再発見する契機として、文化都市・大阪の創出に大きく寄与するものといえるでしょう。

■街の現場力

大阪がこれから都市再生を果たすためには、観光都市としての発展が不可欠といわれています。そのためには従来のステレオタイプな大阪イメージから脱却し、都市に埋もれた歴史や文化を発掘して活かすような観光プログラムの創出が求められています。そのなかで近代建築は大阪の貴重な文化資源として、大きな期待が寄せられています。大阪の近代建築はオフィスなど現役で活用されている事例が多く、内部見学ができないなど単体では観光資源として難しい部分がありますが、船場など近代建築の集中するエリアでは複数の建築をコースとして結び、街を歩きながら近代建築を巡ることで魅力ある観光プログラムとすることが可能です。既に私も何度か諸団体の主催するまちあるきのガイドを務めましたが、毎回定員を大きく上回る応募があり、参加者の満足度も高いという結果が出ています。確かに点在する近代建築を個人で個別に訪ねるよりも、効率的なコース設定でガイドの解説を聞きながら巡れば、建築や都市に対する理解はより深いものとなるでしょう。現在大阪では府・市・関西経済界が三位一体となって開催する「水都大阪2009」の準備が進められていますが、そのなかでも「まちある

き」は主要なプログラムとして位置づけられています。実は大阪には既に様々な組織・グループが個別にまちあるきツアーや実践しているという素地があり、水都大阪2009をきっかけにそれら市民が集結して知識と経験を持ち寄ることで、まちあるきをひとつの観光産業として定着させようとしています。私も近代建築コースの担当としてその計画に参加していますが、まさに今、大阪の街の現場力が試されているといえるでしょう。

■これからの課題

このようにさまざまなかたちで注目を集め、更なる活用が期待される近代建築ですが、やはり課題もあります。最も大きな課題のひとつは、建築そのものの保存・維持については、結局のところオーナーの自主的な努力に依存しているという現状があります。前述のさまざまな試みも、オーナーの協力があってはじめて成立しているもので、これらに対する見返りやサポートといったものはほとんどないといってよい状況です。このまま近代建築に対する期待が膨らみ、パブリックな活用の機会が増えていけば、さまざまな意味で建築の維持管理に負荷がかかるようになり、いずれオーナーの熱い思いや努力だけでは無理が生じます。今後は行政や市民が街ぐるみで近代建築をサポートしていくような、何らかの体制づくりが必要となるでしょう。

また、このような活用の機運を戦前の近代建築に限ることなく、戦後の建築にも広げていくことが今後は必要です。戦後建築も古いものは既に半世紀を過ぎ、徐々に歴史的・文化的な評価対象になってきてはいるものの、その価値はまだまだ社会に一般化しておらず、村野藤吾の作品にみられるように、著名な名建築ですら次々と解体されていく現実があります。個人的には今後、戦後の無名な建築にも積極的な価値を見出し、活用していくことの可能性を、都市の現場において実践していきたいと考えています。

途上国での復興支援に たずさわって

私が国際移住機関（IOM）に勤めるきっかけとなったスマトラ沖地震は2004年暮れに起こりました。2005年明けに何とか博士課程を終える目処がついた私が就職活動していた時に、IOMのShelter Engineerの人材募集案内を目りました。他に大学や研究機関への就職活動をしていたのですが、IOMのジュネーブ本部から吉報を頂いたことで、2005年4月よりこの地震による津波の大被害を被ったスリランカ事務所に赴任し現在に至ります。

スリランカ社会民主主義共和国では、この津波により約4万人の方が亡くなり、約10万戸の家屋が被害に会いました。国の全人口が約2千万人ですから、この被害規模が国に与える影響はかなりのものでした。復興にあたっては、国際機関の支援の下、スリランカ政府が中心となって被災者同士が不平等にならないように、支援内容に対する条件が定められました。各支援団体がそれらを守るように、毎週のように調整会議が行われました。会議ではいろんな国の方々が発言するため、慣れるまでは聞き取るのに非常に苦労しました。職場の代表として会議に参加する際には、何かしらの有意義な発言をして、所属機関の存在感をアピールすることを上司から求められます。

私の現場での役割は、多額のお金が動く中、公正な入札を経て妥当な業者を使っているか、建物の性能は守られているか、対象被災者にきちんと届いているか等を確認します。建築に際してはまず簡単な図面を用意し、後はスリランカ人職員が施工図を用意します。施工は主に外注します。またスリランカ人職員への指導も仕事の重要な役割のひとつです。現在、コロンボ事務所に8名、6つのフィールド事務所に12名の計20名の技術職員で国内の建築事業を担当しています（国内の職員数は約300名）。

スリランカで建設された仮設住宅は、日本円に



国際移住機関（IOM）
大野拓也（A96）

換算すると1戸当たり4～5万円の掘立小屋に近いものです。日本のプレハブ仮設住宅とは雲泥の差です。それでも被災者の中には、以前の住宅と同等レベルもしくはそれ以上だと感謝する家族も少なくありませんでした。建築の要素にあげられる柱、壁、屋根、床といった最低限を確保しただけの空間でも、人々をこんなに幸せにできるのかと「建築の力」を再確認しました。

2006年後半より、内戦の影響で家を追われた人々にもこれまでの経験を生かして仮設住宅やトイレを提供しています。現場によっては、夜通し砲撃音が聞こえ、寝辛いこともありますが、夏の花火の情景を思い浮かべながら床につきます。衛生環境も良いとはいえないのですが、慣れるまでは体調を崩すことが多いです。この環境に適応できない同僚達は職場を去っていきます。

海外の被災地で仮設住宅をつくる仕事というと、輝かしい仕事のように理解していただきますが、災害後の混沌とした中で、被災者の悩みや文句に触れ続け、質の悪い業者の愚行にひるまず、支援団体・外国政府の厳しい注文を受け、財政力を欠く政府を立てて活動するのは、かなりの重労働です。また国際公務員という立場上、倫理上の行動を問われたり、官僚主義に屈せざるを得ないことがあります。それでも住宅が竣工したときに、喜ぶ被災者の笑顔を見るとこの仕事に携わってよかったです。

最後に、この業界に興味がある皆さんへの助言として、語学以上に図面の読み書きができる、見積りができる、構造計算ができる、現場監理ができる等、技術者としての自分の専門をしっかりと持つことです（日本企業や役所のすばらしいところは新人研修にものすごい時間とお金をかけています）。この機会を逃す術はありません）。さらに語学に関しては現地語とまではいかなくとも、英語で業者と議論できるぐらいの度胸は必

アフリカ事務室

要です。単に英語と日本語ができるだけではこの業界では生き残れませんが、技術、語学、体力、コーディネーションといった能力のバランスを持つ人材は少ないですから、こうした能力に磨きをかけて挑戦することをお勧めします。



建設中の仮設住宅内で職員らとの集合写真

雨水利用と水管

雨水回収システム

今日は、アフリカの雨水利用システムについてお話しします。アフリカでは、水不足や水質汚濁による健康問題が深刻な問題となっています。そこで、雨水回収システムが注目されています。雨水回収システムは、屋根や地面から雨水を集め、貯蔵して後利用するシステムです。雨水は、洗濯やトイレの排水など、直接利用されることがあります。また、雨水を貯蔵することで、旱魃による水不足への対応策としても効果的です。さらに、雨水回収システムは、環境保護にも貢献する重要な技術です。雨水は、自然循環によって地表水や地下湧水に還ります。しかし、雨水の多くは、都市化や農業による地表面の汚染により、その品質が悪化していることがあります。そのため、雨水を回収・処理して安全な水として利用する必要があります。雨水回収システムは、雨水の利用と同時に、水資源の有効活用につながる重要な技術です。

喜寿を迎えて

名誉教授 樋木亨

私は昭和6年6月17日生まれ、今年で77歳の喜寿を迎えた。喜寿を迎えてこの6月21日に私の門下生が千里阪急ホテルで喜寿の会を開催してくれた。既に阪大を離れて14年、卒業生からの手紙は最近は定年を迎えた挨拶状が多い。その様な歳になっても私のためにお祝いの会を開いて頂けるのは誠に有難い限りである。しかも私自身は元気で週一回のゴルフも欠かさずに通っている。しかしこの4月16日に家内が自転車で歩道を走っていた時、ガレージからでてきた自動車に横からあてられて転倒し、救急入院して二ヶ月の車椅子生活をせざるをえなかった。お蔭で今年の大型連休は、当然のことながら家は私一人となり、食事の支度から洗濯、ごみだしまで一人でやらねばならず、しかも家の中は空虚であり、毎日の仕事といえば、入院中の妻を30分程度見舞うことだけであった。この時つくづく感じたのは長年つれそと妻はまさに空氣そのものであり、家において当然、おらないことなど考えられないということであった。幸いリハビリテーションをして一応日常生活には戻ったものの完全に回復するまでにはまだ時間がかかりそうである。

私自身は人間ドッグで指摘された白内障の手術を7月末に受けた。最近は日帰りの手術であり、半日の片付生活の後に両目になった時の明るい世界に驚いた。結果としてゴルフの時のボールがよく見えるようになり喜んでいる。

喜寿を迎えたこの年になって社会問題になっているのが後期高齢者問題である。私も75歳を超え、完全な後期高齢者であるが、どうも自分自身がそれになっている感覚はなく、またなにが問題になっているのかもはっきりしない。多分年金からの健康保険料の天引き問題であろう。しかし現実には高齢者になると医者にかかることは多くなるし、それほど個人の楽しみに金を費やすこともなくなり、夫婦つましく生活していくぶんには何とかなるのではなかろうか？それよりもなにより、幾つになっても自分から落ち込むことのないように、さらに新しいアイデアに挑戦していく必要があるのではないかと考える。

私は目下(財)災害科学研究所の理事長を勤めているが、財団法人の存在がきわめて財政的に難しくなっているが、それを克服するためには、理事長として何ができるかを、常に模索している。さらにこの財団法人も平成21年度より見直しがはじまり、従来型の法人が公益法人と一般法人に分けられ、目下その再申請の準備にもとりくんでいる。各所員の協力を得て歴史ある災害科学研究所を守り発展させたいと考えている。

育水と地下水利用

名誉教授 村岡浩爾

「育水」とは文字通り水を育むことであって、英語でWater Fosteringという。

地球温暖化という不気味な現象で地球規模の水循環が変調を来し、降水量の時空間変動が激しくなるということは最早よく知られた事実である。too much waterとtoo little waterの地域較差が大きくなっているのである。このため、地球上ではとんでもない洪水で多くの人命と社会資産が奪われるかと思うと、水飢饉で非衛生な水しか飲めないために多くの生命が失われる地域がある。わが国でもゲリラ豪雨と渇水危機が背中合わせで共存している。

この事態は二つの基本的課題を提起している。一つは温暖化ガスの排出を削減させることであり、これについては京都議定書の達成義務、加えてポスト京都のCO₂削減についての国際的合意をとることであり、平成20年7月の洞爺湖サミットでの主要議題にもなった。国内的にも家庭レベルの削減から排出量取引まで、最近は極く身近かな問題として認識されている。

もう一つは、水循環過程においていかに有効に水を利活用するか、あるいは健全な水循環をいかに構築するかという課題である。我々は、通常、河川からの取水と排水によって生活と社会の場で水を利用している。ところが河川だけを見ても、水量的アンバランスのみならず、水質という静脈的問題もあって、使った水を量的にも質的にも元の形で川に戻すという健全性がない。ここに「育水」を振り返る意

義があるように思う。特に雨水の山間部の保水と涵養はもちろん、平野部における地下水保全の達成が、水の健全性の規範となるのではなかろうか。都市域の地下水は、面的な水資源、熱資源として都市問題の解決に資する重要な潜在力である。

最近、育水と地下水利用に関連すると見られる誠に大きな都市構想が打ち出された。それは改正省エネ法（平成21年4月施行）に基づき、不動産大手がオフィスビル新築に30%のCO₂削減構想を打ち出したことである。日本の部門別CO₂排出量（2006年度）の1990年度に対する増減率は、業務部門（オフィス、店舗など）で39%の増、これは既にマイナスに転じている産業部門と比べて大変分が悪い。これらの対策を強化するための法改正である。不動産業が動き出した背景には、今後小口の業務部門にもエネルギー管理義務が生ずるほか、フランチャイズチェーンにも同様の規制が加わるので、大型新ビル建造に何らかの新たなCO₂削減施設を盛り込まざるを得ない、ということがある。ただ、この技術的手法に、直ちに地下水を利用しようとは言っていない。省エネ照明、自動消灯システム、屋上緑化、窓まわり熱遮断、ドライミストなどによる削減方策でいこうというものである。

今やCO₂問題あるいは低炭素社会を抜きにした都市形成はあり得ない。当然のことながら、あらゆる技術が試行される。そこにおいて地下水の持つ潜在的な力を無視してはならない。地下水の熱交換に関する理論的技術的レベルはかなりの域に達している。またこの応用はビルに関わらず、地下鉄、地下道路等、大型地下空間構造物への展開が期待できる。まだ初期投資の課題はあるものの、近い将来、地下水は水循環の場で面的な広がりの有利さ、局所的な応用のし易さなど、育水さえ怠らなければ地下水利用はCO₂削減対策の大きな武器になることは間違いない。

論 著者アシスタント未故郷の事由

建設産業界の活性化に向けて

名譽教授 松井 保

最近の建設産業界は、バブル崩壊後の建設投資額が年々減少していることや道路特定財源の一般財源化が進められる情勢にあることもあって、あまり元気がない。むしろ、あきらめムードも漂い始めているように感じられる。しかし、建設産業はいつの時代も一国を支える基幹産業であり、それなくしては一国の維持・発展はありえないものである。

もとより、国を治めるには、治山・治水をはじめ種々の土木プロジェクトに負うところが多いことは、中国古来からの例を見るまでもなく、日本の歴史上にも多くの例が見られる。むしろ、小泉改革以来の政治では、土木の足を引張って国民の支持を得ることによって、国を治めようとしているかのようであり、筆者には、非常に奇異に感じられる。

図1は、昭和35年から平成20年までの建設投資額の推移を示したものである。全体を見ると、昭和40年代から高度成長期が始まり、平成4年頃にバブル期のピークに達している。その間、多少の凹凸があるのは、2度のオイルショックなどの影響である。その後、平成8年頃以降現在まで急激な減少を示し、ここ数年は平均的に見て毎年1%程度の減少である。結局、バブル期ピーク83兆円の6割程度になっている。このような急激な変化のうち、バブル期からの減少だけを見つめていても、ため息こそ出るが、何の解決策も浮かんでこない。再びバブル期のような活況を呈することは当分の間ありえないもので、頭をリセットして前向きに考えていくべきであろう。

そこで、現在の状況認識をもっと広い視点から模索するために、図1中に基準線（一点鎖線）を加筆した。この曲線は、高度成長期には直線的に右肩上がりで増加し、その後、ほぼ現在のレベルで推移する。もしこのような建設投資額の推移を経て現在に至ったと仮定しよう。そのときには、建設産業界は地に足のついた着実な発展を続けているものと想像できる。この基準線をガイドラインにして実際の曲線を眺めると、安定成長を続けるであろう基準線上に、高度成長期とバブル期のおまけがついていると見ることができ、非常に楽しい気分になってくる。したがって、現在がバブル期ピークの6割程度になったと嘆くのではなく、現在の建設投資額が昭和59年頃とほぼ同額であることと、当時の状況を思い起こせば、建設産業界もまだまだ捨てたものではないはずである。

現在の建設産業界の状況は、明治維新以来の危機ではないかと考えている。したがって、小手先だけの対応では状況を開拓できないと思われる。明治の初期に土木の近代化を目指してお抱え外国人を雇つ

ていた頃に、命をかけてヨーロッパに密航し、近代土木技術を身につけて、その後の日本の急速な近代化に貢献した幾人かの先人がいた。バブル期を経て 10 数年たった今、ピンチをチャンスとして生かすためには、次世代の建設産業界が活性化する仕掛けを目指して、周到なパラダイムチェンジが必要であろう。命をかけた明治の先人の気概を見習う時期に来ている。

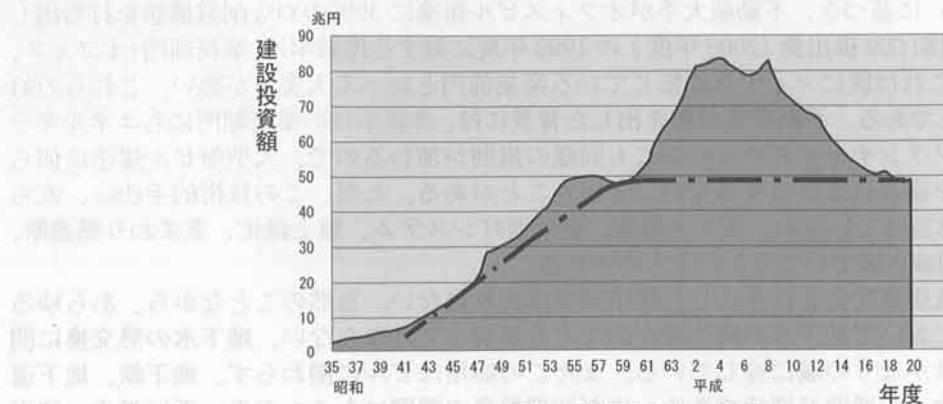


図 1 建設投資額の推移

仕事の後始末を通して社会貢献

名譽教授 西 村 宣 男

早いもので、大阪大学を退職して 3 年半が経ちました。大学での教官としての 40 年間を振り返るとき最も気懸かりなことは、専門としている構造力学について、今日のコンピュータ時代に対応した教育法として確立できなかったことです。手廻し計算機の時代から全ての学生のデスク上にネットワークに接続されたコンピュータ環境が整うまで、構造力学教育の現場に立ち会ってきて、教育環境の充実が社会の要請に対して常に後手に回っていたように思います。それでも大阪大学における構造力学教育は他大学に比べて高い水準を維持してきたと評価されて、私の退職時に幾つかの他大学の先生方から構造力学科目の講義ノートを公開するよう要請がありました。上述のような理由で私自身が自らの講義ノートに確信を持てないことから、直ちに渡すことではなく、この 3 年間はたっぷりと与えられた時間を得心のいく講義ノートの整理に費やして参りました。

整理が完了した資料は出版社を通じて世に出すのが普通の有り方でしょうが、別の考え方方が思い浮かび、資料を構造設計に志をお持ちの方々にメール配信することに致しました。そのために“シースム勉強会”（構造力学に強い設計技術者を育てるためのグループ）を立ち上げ、会員を募りましたところ、現在 80 名の会員数となりました。資料内容は“照査のための構造力学”と称する A4 版 200 ページのノートと、これには書き切れなかった構造解析、構造設計、技術者倫理などの番外編で構成されています。月に 1 回、本編の 20 ページ程度と番外編を 2 編程度のメール配信を続けています。9 月現在で 5 回の配信が終了いたしましたので、目的の半分が終ったことになります。

会員の内、30 名は大阪大学卒業の方々ですが、50 名は他大学出身です。職場の内訳は教育機関の方が 28 名、設計コンサルタントが 10 名、橋梁会社 36 名、高速道路㈱ 6 名などとなっています。設計コンサルタントの技術者にもう少し参加いただきたいと思っています。

このような少し変わった情報発信を行っているのは、退職前の 2、3 年土木学会で関わっていた倫理教育委員会の影響を受けているからだろうと自己分析しています。土木分野における技術者倫理の課題を私の専門とする構造解析・構造設計の分野に活かすには、構造物の設計が正しく行われたことの評価、すなわち設計照査を大切にする考えを広めたいこと、照査の技術を向上させたいと願っているからです。このような活動に興味を持たれシースム勉強会に参加を希望される場合は下記まで連絡下さい。

Mail address: n.nisimura@gai.a.eonet.ne.jp

勿論、入会や資料の授受に費用は発生いたしません。構築会だよりの場を借りて紹介させていただきました。

油 絵

名譽教授 五十嵐 定 義

長い間、大学や試験所の仕事専一に過ごし、顧みて生き甲斐のある生活だったと感謝していますが、七十歳を過ぎた頃から、これと言った趣味のないまま単調で長い晩年をどう過ごせばよいのか、ライフスタイルの切り替えに戸惑いを覚えるようになりました。「生涯現役でありたい」との先輩先生のお言葉に感銘をうけたこともありますが、この年ではもう無理だとしか思えませんでした。

その頃、試験所への通勤の途中、北千里駅の二階に油絵教室のあることに気づきました。月一回五時間程度、これなら本務に障りはあるまいと飛び込んだのが事の始まりですが、それまで絵筆をとったことは一度もなく、オイルをどう使うのかと言った初歩の知識も皆無でしたから、最初の時間に、机上の向日葵を対象に「好きなように描きなさい」と言われて立ち往生したものです。個性重視の稽古事では当然の指導かもしれません。

この教室へは二年間程通ったあと、試験所の理事長退任をもって縁が切れ、暫くのブランクを置いて今は自宅近くの教室に顔を出していますが、平穏無為と予想していた生活は意外に多くの雑事で煩わされますし、寒さ暑さや体調によって全く絵心の湧かない期間もあり、月一回二時間の予定も途絶えがち、それでも七八年経つと二三十枚の小品が手元にたまるようになりました。信州の安曇野や北欧、ドイツ、スイスなど曾遊の地の風景画が主ですが、とてもご披露出来るレベルではなく、独り眺めて追憶に耽るに過ぎません。先日初めてナイフを使って、フィヨルドの荒々しい岩壁を佐伯祐三ばかりに描いてみましたが、「須田国太郎に似て迫力がある」との先生のお誉めの言葉も、高齢者へのいたわりだと心得ています。

もっとも、このような遊びは密かにすべきでしょうが、ほどほど好きな作品を葉書にプリントして卒業生諸君に送ったりするものですから、折々話題にされて赤面しますし、若い方々との集まりの席でひやかしの話題にされますが、それも面白いものだと気楽に割り切っています。また、当初予期していなかったのですが、物の形や色彩、自然の光や影を注意して眺めるようになりましたし、絵を仲立ちに仲間も増えてきていますので、もう少し早く始めておけば良かったという思いが致します反面、仕事一筋で走つて来た五十年の生き方を是認する気持ちも強く、仕事と趣味の兼ね合いは人それぞれでしょう。万事、肩肘張って考えないようにしていきたいものです。

このような気楽な経験談が、やがて後期高齢者の仲間入りされる方々のご参考になるだろうかと訝りながら、文章を果たした次第です。

趣味の延長 私の実験室

名譽教授 脇山 広三

今回は、このところ最も時間を費やしたことについて書くことにいたしました。

きっかけは、丸鋼管杭と角鋼管柱をフランジ接合した工法について、有限要素解析で実験と同様な解析結果が得られるかと聞かれた事でした。このフランジ型接合部では4角のフランジ4隅に2本ずつの超高力ボルトが配置されたもので、柱芯と杭芯が40mmほどずれることを許容すると云うものです。

柱長さ1m、杭長さ1mを特殊なフランジジョイントで接合したモデルに引張・圧縮・曲げ荷重を加えることを考えて、ソリッド要素で構成すると、対称性を利用して、8000程度の要素となることが分かり、私が作ったプリ・ポストプロセッサーの容量をはるかに超えるので、これらのソフトのディメンジョンを増やすことからはじめました。これらのソフトはMacintosh の古いOS-9環境でPASCAL のコードで書いたもので、幸い、現在Classic環境でPASCAL のコンパイラも使い勝手よく働いています。

次に、ソルバーに陰解法のものと、陽解法のものを使って試験的に解析を進めましたが、陰解法の方は時間がかかる、陽解法は早く複雑な条件下でもそれらしい解を出すのですが、解析精度では不満足でした。2ヶ月ほどの試行錯誤の結果、急がば回れ、陰解法を使うことにしました。

解析時間には、要素数・接点数と同時に接触面の性質とその数の影響が大きく働き、今回の解析では、

平均的なモデルでは、G4 Mac で 5 日、G5 Mac では 3 日、Intel Core 2 CPU 6400 2.13GHz の Windows では、2 日程度でした。

私の悪い癖ですが、何か仕事を始めようとする時には、環境を整えると云って、ものを買いたがるのです。先ず、少し、動作の怪しくなった平素の仕事用の Mac G5 を安心して使用できるように、中古の少し上位の Mac G5 を秋葉原より購入、これは新品と値段は代わりませんでした。

PC1 台にディスプレイやキーボードを付けると、小さい仕事部屋に 5 セットのディスプレイやキーボード並べる必要があるので、1 セットのディスプレイやキーボードに 2 ~ 4 台の PC をつなぐことのできるスイッチボックスを 2 台購入し、使用環境を整理しました。

データ作成は Mac 上で作成し、Solver は Mac と Windows で走らせました。Mac と Windows を併用した場合、テキストファイルの行末が Mac では CR(Carriage Return) のみですが、Windows では CR + LF(Line Feed) ですので、その変換を非常に良くできたエディター BBEdit を用いて行いました。

数台の Mac と Windows の混合状態も Lan を高速化し、Lan Disk を仲介にすることでデータのやり取りがスムーズに出来ます。

実際に目的にかなった計算は、5 月頃からはじめましたが、その頃は、Mac G4 1 台、Mac G5 2 台、Windows 1 台の体制でスタートして、コンピュータは平素用の Mac G5 1 台を入力データ作成用にして、他の 3 台はほとんど止めることなく走らせました。私自身いくら慎重にデータ作りをしても、何かミスをして、出てきた結果、数日分が、お釣りになることは日常茶飯事、3 割バッタなら文句はないではないかと自分を慰めていました。

8月初旬、もっと解析効率を上げるために、Intel Core2 Quad Q9450 2.66GHz の Windows Vista 64bit オペレーティング システムのものに 8GB のメモリーを入れたものを Mac の中古より安く購入しました。このシステムですと、1 本の Solver だけですと、30% 程しか早くないのですが、同一マシン上で最高 4 本までの Solver を走らせても、ほぼそのスピードが出せますので、この使用法で効率を上げることが出来るとい喜んでいます。

8 月の終わりに、ほぼ一段落、この時点で有効な計算結果は約 60 ケース、30GB 程度、結構面白い結果が出ているが、どう分析するか思案中です。

黒石とボローニヤ

名譽教授 柏 原 士 郎

道ばたに黒ずんだ雪がそこそこに残る三月の末、青森県の黒石に行ってきました。以前から一度行ってみたいと思っていたのですが、時間が少々出来たのと、旅費がまだ残っていますよ、と言われ、永年の小さな夢をかなえることにしました。目当ては、黒石の「こみせ」。雪国の知恵から生まれた「こみせ」は吹雪や日差しから人を守る、一種のアーケードです。藩政時代からの伝統的建築物群の前面を構成し、「こみせ」のつらなる道は日本の道「百選」にも選ばれています。秋田では「がんぎ」と呼ばれていますが、丁度二人がすれ違うのに必要な四尺程度の屋根のかかった通路が、街並みに統一感を与え、見事な景観を構成しています。江戸時代前期、黒石初代藩主津軽信英は、この地に陣屋を造ると共に侍町、職人町、商人町を加えて町割りを行いました。これが、現在の街並みの基本になっています。「こみせ」は商人町の大きな特徴となって、厳しい冬でも多くの人を集めていたということです。現在でも江戸時代からの造り酒屋、呉服屋、餅屋などの商家が残り、情緒あふれる街並みの重要な構成要素となっています。シーズンオフということもあって通りは閑散としていましたが、立ち寄ったおみやげの屋さんには店のコーナーに舞台がしつらえてあり、津軽じょんから節を無料で実演してくれました。聴衆は私一人。薄ら寒い日でしたが、哀愁のこもった音色にはうってつけの舞台設定のようにも思われました。

宿は、うらぶれた商人宿風の旅館。床の間に置かれた旧式のテレビと石油ファンヒーター。最近では珍しい煎餅布団。階下では、○○板金会社が若い衆を集めての深夜までの大宴会。寝つかれないまま、かつて訪れたボルティコの街、ボローニヤのことを想い出しました。厳しい夏の暑さと冬の寒さをさけるための知恵。国こそ違え、「こみせ」や「ボルティコ」という人間のための街路を生み出した古き時代の

人びとの公共への思いの強さと発想の豊かさに思いを巡らしました。ボローニャの街にクモの巣のように四方八方に拡がっているポルティコはなぜ生まれたのか。12世紀になって、ヨーロッパ最古の大学がこの街に創立されました。大学は土地も建物も所有していなかったので、教授たちは授業を自分の家でやり、ポルティコが廊下の役割を果たしていたというのです。30数年前のB. ルドフスキによるゼミのテキストで仕入れた断片的な知識を思い出しながら、これも煎餅布団と階下の喧噪のお陰、と思いに耽った北の宿の一夜でした。



津軽・黒石の「こみせ」（左図）とイタリア・ボローニャの「ポルティコ」（右図）

（雑感）あたりはずれ

名譽教授 橘 英三郎

人類はそれほど賢くはなってはおらず、自然への感受性は万葉の世界からむしろ退化しているように思える。脳細胞の数はそれほど変わっていないのに、学校やインターネットからの知識がせっせと詰め込まれ、うっかりすれば知識のフォアグラ状態になってしまう。言うまでもなく知識の多さが賢さに結びつくとは限らない。ウォールストリートのエリートと称されるバクチウチは、知識は豊富であっても、あまり賢いとは思えない。5歳くらいの子供でも、私よりは賢こそーと思うような子もいる。感性と知識のバランスがとれ、話していて小気味の良い子である。

ところで、脳も入試勉強などで下手に勉強グセをつけてしまうと既成概念で固まり、それを疑って自分で考え直してみようとする哲学的なクセは薄れていく。また、答えのあるのがある程度見えるまで動けなくなる。

しかし、新しい試みの場合では、とりあえず自分の足で身近な山に登ってみる。すると、もっと高い山が見えてくる。色々とさぐりをいれ、山を登ったり降りたりして失敗を繰り返しながら、より高い頂上へと近づくという方法もある。科学の歴史の中で、これに近い方法でたどりついた成果も結構多い。

しかし、当初の予算の段階で正直に「山を登ったり降りたり…」など、もたもた言えば上司からの「アホカ」の一言で終わりだろう。

それにしても首をかしげたくなるのは研究費の補助を得るために申請書だ。目的を達成するまでのアプローチや予算をこと細かに記入しなければならない。私は、こうした書式を作るのは勉強グセのついた人にちがいないと思っている。この記入要項をデカルトに見せたいものだ。これだけ緻密に書けたら、そしてそれが正しければ研究の半分は終わっている。アプローチそのものも試行錯誤しながら模索すべき研究の対象だからだ。

殆どの場合、申請書はA4で2ページもあれば充分な気もする。研究の覚悟のほどが紙背に見えてくる。それでは不十分かも知れないが、多少のあたりはずれがあってもよいではないか。

問題が言葉ではっきり言えたときは、既に解決しているとさえいわれる。好きな人に僕の嫌いなところを言ってください直しますから、と迫ったところで詮無いことで逆に嫌われるのがオチ。無難だが一分のスキもない申請書の通り実施して積み重ねられる成果は、一種の作業報告書だと思う。それはそれでも良いが、歴史に愛でられるかどうかは別問題だ。それだけは、ただ息をひそめてじっと待つより他はないのだろう。またまた自戒の念もこめて。

(この稿ができるころは、阪大で開催する衝撃・衝突に関する国際シンポジウムも終わり、ホット一息ついている頃であろう。あいも変わらず卒業生の皆様に迷惑をかけている。どうか、お許しあれ)

近況報告

名譽教授 大野義照

今年3月に定年退職をしました。1963年4月に構築工学科に入学して以来45年間、教員になって39年間大阪大学にお世話になりました。この間、学生であった皆様や先輩の諸先生、教職員の皆様のおかげで無事定年を迎えることが出来ました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。1969年、助手になっての初仕事は東野田から吹田キャンパスへの引越しでした。この時期は大学紛争が激しいときでキャンパス内は産学協同反対などとシュプレヒコールが響いていました。学外では1970年の日本万国博覧会の開催にむけて会場、ならびに関連公共事業が国家的事業として集中的に実施されていました。このときに中央環状線、新御堂筋、JR茨木から万博通り、万博外周通りなどの道路網が整備され、地下鉄御堂筋線の延長に北大阪急行線が設けられました。

定年前の数年間は工学研究科の施設関係の委員会に関りました。工学部の建物は1968年から1970年にかけて建設されました。前述のように当時の大阪は建設ラッシュで、工学部の建設は予算の面でも施工の面でも厳しく、外壁のコンクリートは打放しのうえかぶり厚さ不足で鉄筋腐食などの老朽化が進んでいます。鉄筋コンクリート構造学の講義では生きた教材として利用しましたが、残念なことです。さらに、気がかりなことは耐震強度です。耐震強度指標 I_s が 0.6 であれば新耐震基準の強度があると判断されるのですが、工学部の建物の I_s は 0.4 前後です。現在建設順に系毎に5期に分けて耐震改修が進み、2期まで終わっていますが、1期に3,4年かかっています。予定通り進んだとしても最後になる建設系の改修は10年先になります。その間、耐震偽装事件で強度不足のため解体撤去された建物よりも強度の低い校舎に学生を迎えることになります。一日も早く、老朽化対策もあわせた耐震改修が実施されることを祈っています。

この4月から大阪大学先端科学イノベーションセンター特任教授を務めています。このセンターは産官学の連携を推進めざすところで、企業との共同研究、受託研究、技術相談などを受入れています。大阪大学の各分野との共同研究、あるいは技術相談のご要望があればセンターにご相談ください。しかるべき部署あるいは教員を紹介してくれます。詳しくはセンターのホームページをご覧ください。

昨年まで引き受けっていた学協会や財団法人などの委員会の主査や委員を続いているので、まだ時間的余裕はありませんが、山歩きに時間をかけたいと思っています。数年前から妻にもピッケルとアイゼンを持たせ冬の比良山や4月から5月の北アルプスの山に登っています。今年の5月の連休は常念岳(2857m)に登りました。北アの山々はまだ雪で覆われ、槍穂高連峰の眺望と、下山中妻が一の沢の雪面を80mほどスリップするおまけをふくめ、雪山の素晴らしさを堪能しました。8月は学生の時に登り残していた南アの塩見岳(3050m)に登山。今夏は山も天候不順で、1日目稜線に出た翌前から雨と上下左右から稲光と雷鳴にあい、万一のことを考え2人の間に距離を置いて目的の塩見小屋まで3時間歩きました。翌朝は雲ひとつない青空で、南アの山々はもとより、富士山、中央アルプス、北アの山々などの眺望は、前日の緊張を補って余りあるものでした。9月には札幌でのP C 住宅建設現場視察の後、日高山脈の主峰幌尻岳(2053m)に日帰り登山。雨中登山口に駐車したレンタカー内で仮眠、翌朝満天の星の下4時からライトを点け、クマよけのカウベルを鳴らし周囲に気配りながら一人登りました。山頂付近は既に草紅葉、ヒグマに出会うことなく下山し、その日に帰阪。これからも五感を鍛えながら緊張した山歩きを楽しんでいこうと思っています。

昨年も書きましたように、福井工業大学を終えて“サンデー毎日”の筈ですが、大方 week day となつて、大阪のオフィスにもなかなか行けない状態です。10月には、北京に一週間滞在：北京工业大学で開かれた、第8回日中建築構造技術交流会に名誉会長として参加し、論文発表もし、終了後は教え子である同大学の李振宝教授の研究室で、院生との交流、今後の研究計画等の打合せをして来ました。同学科は、拠点大学として、阪大のそれより二周り以上もある大きな実験室に、載荷床、反力壁はもちろん振動台、更には“4000tonの鉛直荷重+400ton水平加力”が可能な装置等を備えており、多くの実験が進行中で、李教授はそのセンター長でした。

その交流会への日本からの参加者は約60名、中国、台湾、香港等合計200名を越す盛大な会でした。一週間の滞在中、天津へのツアーでは、北京-天津間の新幹線で静かで快適な325km/hのスピードを体験できました。

さて、暇なしのもう一つ、コンクリート工学協会に立ち上げたピロティ構造の耐震対策研究委員会は、首都大学の芳村学先生、東北大の井上範夫先生、阪大新任の倉本洋先生、そして土木87卒、鉄道総研の谷村幸裕氏等にそれぞれのWGの主査をお願いし、順調に進んでおります。ピロティ一階をsoft-story(免振層)化出来れば、全層降伏設計と異なって、上階各層の補修、補強は不要となり、コストも余り掛からない免振的構造が得られるので、21世紀の有用な建築構造となる筈です。

その他の“暇なし”的原因は省略。

一言メッセージが二言以上となりました。

名譽教授 鈴木 計夫

大阪大学退官後、福井へ毎週出張の生活になって5年目になります。福井へのドライブ中のリラックスタイム+クラシックアワーでは約100枚シリーズのCDはすべて鑑賞しました。最近では、サンダーバードで行くことが多くなりました。

3月には、会議や講演のない海外旅行〈初めてです〉で、これまで未訪のハワイ島とマウイ島を楽しんできました。前者ではすばる天文台のあるマウナケア(4205m)、後者ではハレアカラ(3055m)の山頂に立ちました。

7月初めには、Vancouver の ISOPE 会議に参加しました。昨年は会長として大変でしたが、今年は定常状態に戻りました。会議後、ウイスラー山頂(2182m)に立ちましたが、氷河の山並が360度見渡せるすばらしい眺望でした。

9月には、ベルギーのゲントで開かれた BAP V 会議で講演をしてきました。主催者である Van Impe 教授(地盤工学会前会長)と旧交を温めてきました。会議後、フランス国内を約2500km走り、ロワール、大西洋岸、プロヴァンスなどにある世界遺産を巡って、命の洗濯をしてきました。

名譽教授 松井 保



《卒業 50 年》

クラス仲間の近況

金山 正吾 (C58)



卒業後 50 年、数字だけではピンと来ないが「半世紀」と思うと感慨深い。クラスの仲間は 73 歳前後になった。昔に感じていた七十のお年寄とは大分様子が違うとは思うものの、それなりに部品がそこかしこ傷んでくるようだ。C58 の 20 人のうち、橋高・寺光・中西の 3 君が昭和末期から平成初期にかけて天逝した。その後は訃報を聞かないが、このところ元気が萎えたり、身体にメスを入れたりする人が増えてきた感がある。

編集氏の注文は思い出・雑感・近況ということであるが、“思い出”よりも“今後の夢”のほうが好きだし、ヒト様にお読みいただくほどの雑感なんて、おこがましくて書けない。

ここは一つ、クラス仲間の近況を、私の主観を基に紹介することにしたい。

栗井 邇君：現役時代の猛烈ぶりの反動か、今は悠々自適。日々、お孫さんと楽しむ。頑なに、メールもファックスも遠ざけている。

小野 精一君：さすが、楠本賞。余生の今も、鋼構造の原書に親しむ。漢詩や短歌を愛好する文化人、教養人の面もある。

奥 聰君：往時からネバールの山に馴染み、シェルバとの親交も深い。今は、家庭菜園で食料自給に努め、夫人とテニスを楽しむ。

金山正吾君：CVV（熟年土木屋のボランティア集団）の世話人。老後の楽しみと社会貢献を模索する。<http://cvv.jp> を訪ねてや～。

木村悌士君：本場ヨーロッパのオペラを楽しむ。観るだけでなく、自ら歌う。さらにオペラ講座の講師など、まさにオペラ漬け。

近藤俊雅君：真面目な人柄は今も変わらない。終生、夫婦水入らず。郷里の岡山に帰って余生を楽しむとしようか、と思案中。

須磨洋二君：老人大学 3 年生。ヘボ暮、ヘボゴルフの再修業に熱中。終生の趣味「蝶採集」に、お孫さんを引き込むべく画策中。

豊島良三君：最近、体調が優れないらしい。現役時代の大活躍の疲れが、今頃出てきたのか？ ゴルフの熱も、今は冷めたとか。

中森敏博君：集会所建設に情熱を注ぐ。天理市、宝くじ協会の補助によりめでたく完成。目下、会員の「災難を防ぐ」対策を検討中。

長谷川泰資君：時に来阪する。来れば、私宅にて一杯やることになる。みやげに花園饅頭を所望しているが、未だに実現しない。

播本章一君：昨年暮に「橋梁余話」を上梓した。後輩に贈る“橋屋五十年の体験記”である。今春、胃と腸の不具合を克服した。

人見昌地君：「今後、いっさい連絡無用！」の宣言から十年以上経過した。

平田忠積君：現役時は技術指南で全国東奔西走したが、今は悠々自適。腰痛を庇いながら、月 2 回の元職場ゴルフ「名人会」に皆勤。

松村義章君：悠々自適の日々を楽しんでいた元気な人だが、最近一病息災の生活に変わらざるを得なくなってきたとか。〈長生き万歳！〉

森 喬君：元職場の O B 会のまとめ役で、忙しい。名立たる虎キチは、毎年「プロ野球選手の年俸リスト」をメールしてくれる。

森下弘士君：今も、P C 橋梁設計の下請け仕事をこなす。その稼ぎで？、愛妻殿と海外旅行に精を出しているらしい。

渡邊義方君：最近、体調が優れないとか。耳が遠くなったと嘆くが「それは長生きの秘訣だよ」と慰めている。〈何事も前向きに！〉

《卒業 50 年》

昭和 33 年ごろ

野田 耕市 (A58)



先日建築コース卒業 50 年の同窓会を京都で行った。卒業は 20 人だが 12 人集まつた。想い出の写真・品物の持参をお願いし、友人の持ってきてくれた写真を見てひとしきり話が弾んだ。私は昭和 58 年に嵐山での同窓会で鷲尾先生からの「礼状」の手紙を持っていった。先生は手紙と一緒に余ったお金も同封されていた。この手紙は私のお宝になっている。

大学入学は昭和 29 年、工学部全体で 400 人の入学、志望学科は 1 年半の教養の成績で決まる。定員オーバーの学科は少ないところに回ったが建築コースは定員未満の学科だったため必要最小限の学科で進級した。

教養は南校で 200 人が名前の順に 4 クラスに分かれ C クラス。友人に「な」行が多い。席が隣り合つた同士でグループができ今でも続いている。最初に皆で見に行った映画が「7 人の侍」でこれがグループの名前になった。その時人気のあった授業が犬養孝先生の万葉集の講義だった。先生は生徒を連れて万葉旅行をさせていたのでこれにも参加し今でも集まって楽しんでいる。

構築に入り枚方（御殿山）校舎、東野田校舎とタコ足大学と云われた校舎を移動した。枚方校舎はもとの火薬庫と聞いているが校舎周囲に堤防があり穴の底の授業だった。1 年後東野田校舎に行った。研究室は鷲尾研、奥島研、足立研、馬場研の 4 つ。構造計算の演習は計算尺と手動のタイガー計算機を使ったのがなつかしい。今の電卓がはるかに高性能だが計算尺もお宝で残っている。東野田校舎の前にアイススケート場があり、製図に疲れるとスケートに行き小さな小学生の女の子と手をつないで滑った。

30 年卒業、2 週間の東京での新入社員教育の後、広島支店に勤務した。大学卒の新入社員は久しぶりとのことでめずらしがられた。赴任翌日から自転車で工事現場へ。建物は出光興産の社宅で日建の設計だったが、寸法が尺で書かれていたのにはびっくりした。尺で書かれた図面はこのときだけ。現場で尺の入った折尺を使ったがこれもお宝で残してある。コンクリートは現場練りで生コンはもう数年後から。足場は丸太、資材は馬車が運んできた。安全靴は無かったので運動靴か長靴、釘の踏み抜きが痛かった。一年後東洋工業（マツダ）の工場建設現場に勤務。トラッククレーンなどなく丸太を使って上手に薦工が鉄骨を組み立てていた。この時の鉄骨の勉強と製図が大阪支店に帰ってから役に立った。

5 年後大阪支店に帰った。大阪万博の「お祭り広場」、大阪駅前の「マルビル」、「京都競馬場」改築工事と大阪では 3 つの工事しか参加していないが、機会があればこの工事の想い出を皆に話している。この後設計部に所属したが、このときは建築士事務所協会と建築士会に関係し、又知り合いが増え今でも続いている。

60 歳の定年の後、先輩の紹介で玉手山学園に勤務した。仕事は建物の保守管理、仕事を受注する側から発注する側に代わった。専門学校では一度やってみたかった建築の授業もさせてもらった。

同窓会は「大阪大学工業会」で現在大阪支部副支部長、「構築会」では昭和 56 年に大阪支部の副支部長をした。33 ~ 34 卒の集まり「沙羅の会」は毎年 6 月雨の時期に夫婦で集まり女性に好評。ゴルフ「345 会」は 33 年組がへばって先細りとなり 36 ~ 38 卒と合同「345 花緑会」になり継続している。

卒業 50 年、記憶は友人のことばかりで現在は付き合いで毎日を過ごしていく忙しい。勉強した記憶はあまり無い。何かあればその都度先生・同窓の皆さんに相談しあう世話になった。感謝。



《卒業 40 年》

卒後 40 年と構築会

香西 喜八郎 (A68)



《卒業 40 年》

卒後 40 年と構築会

香西 喜八郎 (A68)

日々明日の仕事に追われ卒後 40 年が過ぎました。寄稿のご依頼を頂くまで 40 年の意識はありませんでした。足立先生のご推薦により面接にて東畠建築事務所にお世話に成って以来、筑波研究学園都市の仕事で 4 年間の東京勤務の他は大阪暮らしでした。今では記憶が定かではありませんが京橋キャンパスの最後の世代であると思います。千里移転が決まっていたので新たな環境整備は全くありませんでした。しかし雑然とした製図室にこもる夜の珉珉の餃子の臭いが懐かしく思われます。環境を同化させる為、食事に出た者は餃子を買って帰る心遣いがありました。専らクラブ活動に明け暮れる級友の為のノート係が私の役割りでした。

計算尺から手回しの計算機や卓上電算機を経てパソコン、T 定規からドラフターを経て CAD へと今や物作りはツールに取り込まれ努力と苦労のプロセスの痕跡は見えません。建築が建つ条件の複雑化、高度化、大型化に対応せんと黙々と画面とにらめっこをし、隣の席へもメールを送る時代と成りました。建築も「作品」から投資対象の「商品」となり、完成した時には依頼主が変わっている時代です。建築事務所の業務も設計監理から川上の企画、川下の維持管理の双方に広がり物作りへの打ち込み方も難しくなっています。

建築学会の論文発表の席で他大学の先生からの攻撃を阪大の諸先生や諸先輩にガードしていただいた時に同窓を初めて意識しました。刎頸の交わりの友がいるわけではありませんが、水が方円の器に従う如く自然体で多くの方と接して生きる力を授かりました。人は群れて住む動物であり世の中に孤立して存在得ません。その時々に何らかのグループに属し、他者と関係し協力し合う事により自らを見失うこと無く社会的に存在することが出来ます。オリンピックにおいては国家を、ノーベル賞においては国や大学を日頃の経済活動に於いては我が社を意識します。同窓は 4 ~ 6 年間机を並べただけで人種、性別、国家等や生活や経済活動のグループを横差しにする不思議なグループです。そこで培われた体験がその後の人生の雪だるまの芯となっています。同窓という帰属する場の存在そのものが、一見協調しながら水面下では流されまいと懸命に水を搔いている競争社会の中で、シンパシサイドに立ちお互いに啓発し成長する安らぎとなっています。

構築工学科から建築工学科・土木工学科、更に環境や地球総合工学へと古い人間には何を勉強するのか理解しにくい名前に変わり、構築から何となく疎遠に成りつつありますが、未永く構築会の発展を願うものです。

以上

《卒業 30 年》

30 年目の学生たち

後野 正雄 (C78)



後野 正雄 様。同窓会の司会者として、30 年目の学生たちの挨拶を行いました。中辻先生、出口先生、新田先生、奈良先生にもご出席頂き、総勢 30 名の出席者であった。大広間での会食のあと、宿の一間に集まり夜更けまで杯を傾けた。

我が C78 の卒業 30 周年同期会を 10 月 4 日に有馬温泉「ねぎや稜楓閣」で行なった。学生時代にお世話になった教員で現在大阪大学に在籍されている中辻先生、出口先生、新田先生、奈良先生にもご出席頂き、総勢 30 名の出席者であった。大広間での会食のあと、宿の一間に集まり夜更けまで杯を傾けた。

過ぎてみればあっという間の 30 年、50 過ぎのおっさん連中が集まると、「次の衆議院選挙に出るんか? それとも県議か」という冗談か本気かよう分からん話もあれば、「最近の若いもんは...」で始まる話もある。

しかし、杯が進むにつれて皆が学生に戻って行く。30 年間の経験と知識を持ちながら学生時代と同じ気持ちになって行く。馬鹿話のなかに政治談義や人生談義が混じり、学生時代の下宿で交わした議論と同じようにだんだんと熱くなって行く。飲み潰れたヤツが出始める頃には芸術談義まで飛び出した。いやいやみんな心が熱い。50 過ぎのおっさんの顔の下に学生時代と同じように熱い心が隠れている。いやその温度は学生時代より高いかもしれない。

この温度は同窓会一夜の熱とは思えない。20 年、25 年のときとは何かがすこし違う、まるで今の仕事のために残された 10 年足らずの年月を駆け抜けるために、一人一人が自分の心の熱さを再確認するために集った、そんな気がする。

閑話休題、先生方を交えた会食のとき、同期の内田恵介君が描いた似顔絵が紹介された。

描かれていたのは 30 年前の教授陣 6 名である。80 年中頃までに卒業された諸氏には私の稚筆な文よりも似顔絵の方が楽しんで頂けると思いますので、より広い似顔絵のスペースを確保するためにも、短文ですがこれで筆を置きたいと思います。



小松定夫先生

室田明先生

毛利正光先生

楠木亨先生

前田幸雄先生

伊藤富雄先生



《卒業 30 年》

卒業 30 年目の同窓会

吉村 英祐 (A78)

大阪工業大学工学部建築学科



《卒業 30 年》

さよなら等の日本 08

A78 同窓会

1978年に卒業して、はや30年が経ちました。その間、3年数か月の設計事務所勤務期間を除いても、大学での勤務が通算で四半世紀を超えたことに改めて驚くとともに、今までお世話になった多くの方々への感謝の気持ちでいっぱいです。昨年4月から勤務しています大阪工業大学には、同期入学の後野正雄君(C78)がすでに都市デザイン工学科のベテラン教授として勤務しており、部屋は同じ建物の同じ階、教授会では隣の席で、何かと助けてもらっています。

さて、私の同級生は、吹田キャンパスに来たついでに私の部屋に立ち寄ってくれたり、私的な集まりによく誘ってくれたりしていましたので、年賀状のやりとりだけの方も含めると、同級生の7割以上と常に連絡がとれています。そのせいもあってか、多くの同級生から「あいつは今どうしてる?」などとよくたずねられますが、逆に業界の近況や阪大建築の評判も教えてもらいます。そうしたなかで、「おい、そろそろ卒業30年(1974年入学組)の同窓会をやろう」という機運が自然に盛り上がり、これまた当然のごとく私が連絡係を担当することになりました。バブル景気のまっただ中であった10周年のときは違い、あてにしていた企業の保養所はどこも売却されていましたが、こういうときに真価を発揮するのが、頼もしい幹事団(朝倉、池上、宇田、江本、西田、園田の各君)です。わずか2か月の準備期間にも拘わらず、園田君が神戸製鋼ルートで「ホームズスタジアム神戸」(旧・神戸ウイングスタジアム)を確保してくれるなど、みなで手分けして無事開催にこぎつけました。

2008年5月10日(土)の午後4時に集合し、まずは施設内のスポーツクラブで「メタボチェック」。互いの結果を見せあうなどして、さっそく和気あいあいのムードに。午後6時からは施設内のレストランに植崎、鈴木、脇山、柏原の各名誉教授をお迎えし、参加者21名(うち14名が1泊)とともに大いに盛り上りましたが、恩師の変わらぬお元気さと暖かい励ましのお言葉に、われわれもまだまだがんばらなければとの思いを新たにしました。

うれしかったのは、「渦中」にあって連絡がとりにくい方や、小野木(旧姓・関)さん、卒業を目前に退学し医学部に進まれた竹山(旧姓・繁村)さんの「紅二点」が駆けつけてくれたことでした。次回は、今回ご欠席された名誉教授の先生方をはじめ、同級生全員の元気な顔が見られることを楽しみにしております。

最後に、2年生当時と卒業後30年の写真を並べてみました。欠席されたみなさん、どれが誰だかわかりますか?(写真ご希望の方はyoshimura@archi.oit.ac.jpまでお願いします)。



岡田光正先生からご退官されるときにいただいた、専門課程に進学した当時の写真。
1975年10月頃の撮影と思われる(後列右から3人目が私)。



名譽教授（柏原、鈴木、楢崎、脇山の各先生、前列左から3~6人目）を囲んで記念撮影。立ち入り禁止の天然芝（奥の部分、立っているのは人工芝ゾーン）は、ほんとうにきれいに手入れされていました。

《卒業 20 年》

20 年を振り返って思うこと

鍋島 康之 (C88)

明石工業高等専門学校

都市システム工学科准教授



早いもので我々が昭和 63 年 3 月に大阪大学工学部土木工学科を卒業してから 20 年が経過する。この間にバブル景気の崩壊とその後の不況を経験し、さらに近年の公共事業の大幅削減と激動の時代を経験した。その間に、大阪大学は大学院重点化で大学院大学になり、土木工学科も地球総合工学科へと変革を遂げている。卒業後一貫して研究・教育に携わっていて、一番変わったことは女子学生の数が増えたことだと個人的には考えている。我々が学生の頃は工学部には女子学生はほとんどおらず、建築工学科でも数名の女子学生がいた程度であったが、近年は女子学生の数が増え、土木学会の年次学術講演会でも女性の発表者が著しく増加してきている。しかしながら、就職に関しては女性に対しては依然として業種が限られていて、あまり変わっていないように思う。しかも一般的には結婚や出産を機に退社する場合が多いようである。せっかく教育した技術者を建設業界は生きしきれていないのではないかと思っていた。そこで、私が所属している明石工業高等専門学校では平成 19 年度から文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業」の助成を受け、「結婚・出産後に社会復帰を目指す女性のための CAD 実技習得プログラム」という企画を立ち上げ、CAD の技能訓練を行って女性の社会復帰を手助けしている。昨年度は、募集定員をはるかに上回る応募があり、大変な盛況であった。また、今春に実施された CAD 利用技術者試験に合格した受講生からお礼状をいただき、この技能講習をきっかけに再就職活動を始めたことを伺った時にはこの企画をして良かったと心から思った。建設業界も女性技術者が一生懶り働ける職場に変革・整備していくことが重要であり、性別にかかわらず優秀な人材を有効に活用することが今後の建設業界のためであると考えている。そのために、大学等の教育機関がはたす役割は非常に重要であると考えている。

最後になったが、本年 11 月 8 日に大阪で 20 年会を開催する予定であり、名譽教授の先生方をお招きする予定である。現在、数名の同級生と協力して同級生に連絡をとり、20 年会への参加を呼びかけており、盛況な同窓会になると確信している。



《卒業 20 年》 あれから 20 年

椎名 辰之 (A88)

大阪市計画調整局建築指導部
建築確認担当課長代理

昨年のことになるが、20年という歳月の威力を感じる機会があった。20年前の学生時代に、無謀にも初めての海外旅行で、しかもバックパッカーとして訪れた中国の上海を再び訪れたのだった。空港から中心部へは、最高速度が時速430キロで世界最速のリニアモーターカーが走った。地下鉄に乗り換えると、携帯電話はもちろん iPod や小型ゲーム機を持った若い人たちが多くいた。20年前は地下鉄すらなかったのに。中心部に着いて地上に出ると、浦東と呼ばれる地区には近未来的なデザインが印象的な超高層ビルが林立していた。今年になって日本の森ビルが世界第2位の高さの超高層ビルを完成させた地区だ。20年ぐらい前は水田や湿地帯だったらしい。それが今では世界金融の中心をめざすという。光陰は矢のごとしだが、上海では発展も矢のごとしだった。それにしても20年でここまで変わるとは。

何かと中国のこととなると懐疑的な意見が目立つようだ。私のイメージは、あの都市の最も輝く部分と20年という歳月を単純に結び付けているだけかもしれない。しかしながら、お金と技術と勢いと、そして20年という歳月があれば、都市はこれだけ変わるものだと、私の体験ではあるがあまりにも強烈に印象付けられた旅であった。

わが国では、今ではそのような劇的な変化はあり得ない。しかし、20年前と比べると、着実に移り変わってきたものもある。調べてみると日本の国がインターネットに接続されたのが約20年前だ。その後のインターネットの普及と発達はめざましいものがあった。携帯電話も20年前はあの肩掛け式のショルダーホンがまだ残っていた。それが今ではご存知の状況だが、これは「ドッグイヤー」と呼ばれる情報技術の世界ならではのできごとだ。

一方で、変革に時間のかかるものもある。先述の上海だけでなく、近年に私が訪れた東アジアの都市の香港やソウルや台北では、例えば地下鉄などの交通機関のカードは、早くから IC カードに切り替わっていた。日本ではようやく普及してきたところだが、未だに磁気キップや磁気カードが混在している。これは、様々な鉄道事業者が絡むことや制度上の問題もあって導入が容易ではなかったのだと推測する。しかし、どうもわが国では、新しいシステムをめざすときに特有の事情で時間を要することがあるようだ。

社会の変革の勢いという意味では、私たちの世代が大学を卒業したちょうど20年ぐらい前が頂点であったのではないか。上がり続けた地価がその後にドスンと落ちて、そこからはすべてにおいて減速を余儀なくされた。あれから20年である。しかしここへ来て、さらに新たな転換点を迎えているように思われる。わが国がいよいよ人口減少社会に転じたとの新聞記事を目にしたのは数年前だ。当時は実感がなかったが、いよいよ来るべきものが来たなと感じたことを覚えている。自動車の保有台数が初めて減少したとの報道も記憶に新しい。保有台数の減少は少子高齢化が原因だろう。しかし、さらに今の若い人たちには、世界でもめずらしくクルマ離れが進んでいるのではないか。20年前には学生にもクルマは憧れであったことを懐かしく思う。今という時代には価値観においても新しい変化が起こりつつあり、これまでとは違う対応が求められている。

実は、先ほどの交通機関の IC カードには、例えば香港では日本の技術

また、人間の会話で使う「ひな」の言葉が入ったのが、私がこの時代で最も多く使っていた言葉です。

小さい頃から本音を隠さず、まちしりつ

の言葉が、誰もがこの言葉をこころに持つべきだと感じています。

この言葉を多くの人に伝えたいと、私はこの言葉を大切にしています。

この言葉を大切にすることで、多くの人に喜んで貰えたらうれしいです。

が採用されている。わが国の優秀な技術は健在のようだ。新幹線など鉄道自体の技術がアジアに輸出された話も聞き及ぶ。さらにわが国は、技術だけなくきめ細かなサービスも得意とするところである。いささか話が大きくなりすぎたが、このような得意技を活かしながらこれから時代を築いていくべきであり、私もその一員でありたいと思うのである。

《卒業 10 年》

10 年間の雑感

八丸 真 (C98)



10 年間の雑感をテーマにを書いて欲しいと言う依頼があり、他にはいいのか??と思いつつも同窓生を代表して拙文を披露したいと思います。

まずは、同窓生のみなさんお元気ですか。私は相変わらず大阪でわりかしトラブル無く日々を過ごしています。

さて、ここからが本題の 10 年間の雑感です。

構築会の記事を依頼された時に、まず心に浮かんだのが「もう 10 年も経った?」と言う驚きでした。同窓生の多くが大学院に進学しているので、その気持ちが分かる人も多いと思うのですが、区切りは大学卒業ではなく就職と言う感覚がどうしても強いわけです。

会社では(「そろそろ中堅」と言われながらも)、バタバタと目の前の仕事を片づけるだけで手一杯だったりと、まだまだ「10 年選手ではないよ(=まだまだ若いよ)」と言う気分で日々を過ごしてきました。

今回、「あなたたちも卒業して 10 年ですよ」など面と向かって言われてしまふと、そろそろ落ち着かなければいけない気持ちになってきます。

確かに最近は、それなりに責任のある立場で仕事を任されることが多くなってきたこともあり、うかうかしていると、あっと言う間に 1 週間が経ってしまいます。しっかりと成長していくないと「もう 20 年経った…けど、何も変わってない」なんて恥ずかしいことを、ここで書く羽目になりそうです。

と、反省の弁を述べてすっきりしたところで、私の個人的な近況です。

卒業して以来、大阪→京都→大阪と引越をして、その中でも京都の家はおもしろい家でした。茶室を移築した建物で、寝室にはガラス窓がなく障子だけだと、台所が別棟になっているので、冬の寒い日でも、夕食後に外に出ないといけないとか。色々と事情があって離れてしまいましたが、また状況が許せば戻りたいものです。

仕事については、会社も変わらず、そこそこ忙しくやっています。

仕事以外の話題として、就職してから始めたミュージカル・ソウは、「のこぎり音楽協会関西支部 10 周年」のイベントが終わって気が抜けたのと、仕事が忙しくなったってことで最近はご無沙汰。

卒業時に売ってしまったけど、また欲しくなった MTB は、買ってから 3 年ですが、月イチぐらいで箕面を中心に山の中を走っています。こちらは、週末のちょっとした時間で遊べると、あまりお金がかからないってことでまだ続続中です。

MTB のトレーニングと思い始めた自転車通勤は 2 年目になりましたが、最近は朝、なかなか起きられずさぼり気味。今年は走行距離が 3000km を下りそうなペース。



皆が既に活動的で、これまでの経験を活かして新しい取り組みや活動を行っている方が多い。また、卒業後も多くの卒業生が地域社会に貢献している。

ところで、最近、高校の時の友達と「久しぶり」に会う機会が増えてきました。いい感じに間があいたのか、当時、別に仲良くなかった人とも普通にうち解けて（「はじめまして」で会話が始まることもあります）話せるようになりました。

大学の時に「別に仲良かったわけじゃない人」とも、久しぶりにあったら、それなりに楽しく話せるのでは？なんてことを思い、ここで卒業10周年の同窓会の開催を勝手に宣言します。

などと、勢いに任せて書いてしまいましたが、机を並べたのも多生の縁（と言うより深い因縁になる？）ですし、この辺りで仲良かった人だけでなく、みんなで集まるってのもよいことじゃないでしょうか。うん、良いことに思えてきた。

場所と時間は未定。企画の持ち込み大歓迎なので、我こそはと思った方は連絡ください。私の連絡先が分からなければ、構築会の事務局を通して頂ければと思います。もちろん幹事の立候補も大歓迎です。

幹事も引き受けないなんて、飲む口実を作るためだけに同窓会を企画したんじゃないかな？って疑う人もいるかもしれません、決してそんなわけじゃなく、ただただ旧交を温めたいだけなんです。と、言い訳しながら駄文を締めさせていただきます。

《卒業10年》

10年を振り返って「時間」について考える

橋本 武士（A98）



まだ新人という意識で日々頑張っていましたが、学部卒業から10年、修士課程修了から8年が経過し、気付けば社会人になってからの期間が大学在学期間を超えていました。

この度、「学年委員なので10年を振り返る原稿を書く」話を頂いたものの、そもそも自分がどういう過程で学年委員になっていたのかがどうしても思い出せません。きっと、くじ引きか何かで決まったのでしょう。このように無責任極まり無い話ですが、この度ようやく1つ仕事を果たせそうです。

現在の仕事は、駅前再開発を始めとする不動産開発の事業検討が中心です。ここでは企画だけでなく、開業後の施設運営計画の立案や、開業準備に携わることもあります。その他、建物ボリュームの検討、事業収支計画やテナントとのやり取り、近隣住民への説明（時には怒鳴られに行ったり・・・）、行政協議等々、多岐に渡ります。色々な事が出来る（言い方を変えれば、何をさせられるか分からない）ので、個人的には毎日飽きること無く何とか仕事に取り組んでいます。

不動産開発事業を進める上では、まず投資に対して幾らのリターンが得られるか？が至上命題で、敷地条件から何が建つか？法的制約をクリアする方法は？といった現実的な話ばかりです。しかし、これらの事だけを淡々と追求しているだけで良いものができるはずはありません。様々な制約の中で、まちづくりの視点やプラスアルファの要素を如何に落とし込めるかがポイントです。事業計画を立てる際にも、「土地の値段」だけでなく、歴史を紐解きながら、そもそもここはどのような地域・場所か？といった「土地の声」を聴いてみる、そして「人々がそこで過ごす場面」を想像してみることが重要

だと常々（時々忘れそうになりながらも）感じています。

私が大学に入学した頃は、既にバブル崩壊後で建設業界も右肩下がりの状況でした（ちなみに会社に入社した頃は就職難で、どうも華やかな時代には縁が無い様です）。まあ、本人は大学に入ったばかりで期待やら不安やらで浮かれており、そんなことも関係なく過ごしていた訳ですが。最近は大学近くに行く機会もありませんので、昔よく遊びに行った所が今はどうなっているのだろうか？と懐かしく思い出されます。そんな折、「Google ストリートビュー」という便利なツールが！という訳で、（バーチャルではありますが）久々に思い出探訪を・・・と展開していきたい所ですが、字数制限もありますのでその話はここでは割愛をさせて頂きます。

こうして学生時代を改めて思い返し、今の生活と比べてみると、まず「時間の流れ方」が全く違う事に気付きます。平日は仕事の締め切り、休日は育児（現在10ヶ月の息子）と、毎日追い立てられる様に流れる現在の時間に比べると（それはそれで充実していますが）、学生時代は何と時間が豊富で、そして勿体ない時間の使い方をしていた事か！と悔やまれます。あの頃の独特の時間は、今では絶対に得られない貴重なものです。もちろん学生時代も、設計課題や論文などの締め切りはあり、（無計画な為か）時間はあるのに何故か提出日の前日は徹夜でした。しかし、それはそれで楽しい時間だったと思います（ちなみに、今では徹夜は全く楽しくないのでしません）。

最近は、社外においても構築会の先輩または後輩の方々と仕事上で一緒に働く機会が増え、学生時代にはほとんど意識していなかったタテのつながりについて実感するようになりました。一方で、どうも疎遠になりつつあるヨコのつながりについても、機会を見つけて復活させたいと思います。

おやじのうぢいひおはさご。このへんまで書くと洋風な
雰囲気になりますが、おはさごを書くと、おはさごの意味が
よくわかる。そこでおはさごを書くと、おはさごの意味が
よくわかる。

おはさごのうぢいひおはさご。このへんまで書くと洋風な
雰囲気になりますが、おはさごを書くと、おはさごの意味が
よくわかる。そこでおはさごを書くと、おはさごの意味が
よくわかる。

おはさごのうぢいひおはさご。このへんまで書くと洋風な
雰囲気になりますが、おはさごを書くと、おはさごの意味が
よくわかる。そこでおはさごを書くと、おはさごの意味が
よくわかる。

おはさごのうぢいひおはさご。このへんまで書くと洋風な
雰囲気になりますが、おはさごを書くと、おはさごの意味が
よくわかる。

スポーツの秋



社会基盤工学コース

博士後期課程2年

前田 瑛美

金木犀の香りが風に揺れる今日この頃。この構築会たよりが届く頃にはすっかり季節も変わっていることでしょうが、読書の秋に芸術の秋、皆様どのような秋を過ごされたでしょうか。

毎年もっぱら食欲の秋を満喫する私ですが、今年は少し新しく「スポーツの秋」を楽しんでいます。私をよくご存じの方は、きっと、「あの万年運動不足の前田が?」と驚かれることでしょう。今まで、これと言って運動らしい運動をした経験のない私が、どうしてスポーツなど始めようと思ったか。きっかけは、身体に忍び寄るエイジングの波を感じ取ったことでした。

初夏のある日、お風呂上がりにふと自分の体を見て、はっとしたのです。「今までどちらがう。」どこが、と聞かれても、はっきり、ここ、と言えるわけではありません。体重も変わってない。食事も変えてない（お菓子が少し増えただけ）。でも確実にちがう…。強いて言うならシルエットでしょうか。昔、よく先輩方から「24、5を境に体が変わるよ」と言われてきましたが、まさにこれがそうか！といった衝撃でした。

女子たるもの、このような事態を甘んじて受け入れられるはずもありません。さっそくジム通いを始めました。学校近くの、某市立体育館のトレーニングルームを利用して、目標週2回、現実は平均して週1から1.5回程度でしょうか、せっせと自転車を漕ぎ、筋トレメニューをこなしています。

大した運動量ではないとはいえ、定期的に体を動かすようになって心と身体がつながっていることを改めて実感しています。気分がいいときは精力的に自転車を漕げますし、汗もいっぱいかけますが、もやもやした気分ではマシンで筋トレしてもうまく力が入らなかったり。反対に、はじめは気分が乗らなくても、体を動かしているうちにすっきりってきて、調子が上がってくる、ということもあります。また、トレーニングをするときは、負荷をかけている筋肉を意識する

とよい、と言いますが、本当にそうですね、確かによく効いている気がします。不思議なものです。筋トレに限らず、自転車も、本を読みながらするのと集中してするのとでは、発汗量がちがう気がします。

自分の心と身体が呼応するこの感覚、新鮮でおもしろいです。通い始めて数ヶ月、なかなか目に見える効果は現れてくれませんが、迫り来るエイジングへの危機感とこのおもしろさに背中を押され、気長に続けていこうかな、と思っています。

とは言え、飽き性な私がジム通いを続けられているのには、ほかにも理由があります。久しぶりの「何かができるようになる実感」、これが日々のモチベーションアップにも有効に働いているからです。

私の普段の生活は、およそ地味なものです。研究室にこもる毎日は、楽しいこともたくさんありますが、遅々として進まない研究、依然成長しない自分、そういうものを目の当たりにして、不安といらだちを持て余すこともあります。そんなとき、10回の腹筋で吐きそうになっていたのが15回できるようになったり、面倒くさがりなのにちゃんと毎晩ストレッチするようになった自分を見て、やればできるやん、と認めてあげられるのは、精神衛生上とてもいいことのようです。ささやかすぎて自分でもおかしいですが、日々の営みって意外とこういうものに支えられているのかも、と悟ってみたりしています。

そんなこんなで体を動かす気持ちよさに目覚め、最近ではゴルフも始めました。なかなか筋がいい、などとおだてられつつ、打ち放しに励んでいます。初心者ゆえ、練習するたびに上手になるのが実感できるので、これまた楽しいです。はやくコースに出たいな。（ゴルフのお好きな方、ぜひ誘ってください。）

これから迎える冬にはスノーボードも待っていますし、スポーツ熱はしばらく続きそうです。



31歳のモラトリアム その2



建築工学コース
博士後期課程2年

田島 喜美恵

2007年構築会『学生からのたより』の谷内久美子さんの『31歳のモラトリアム』を読み、私とよく似た環境の人が近くにいるのか！と驚きました。そのせいもあってか（？）今年の『学生からのたより』を書く機会をいただきました。

私は2007年4月に博士後期課程に入学しました。私はかなり変則的な経歴で大学院に入学しました。学部を出てすぐに東京で働きはじめました。そこで設計や展覧会や出版の仕事に携わりました。それに加え学会活動や、パキスタン地震時に専門家派遣事業で現地入りし復興住宅プロポーザルなどをした経験を通して、大学院に行ってみたいなという気持ちがふつふつと芽生えてきました。しかし東京で一人暮らしをしながら仕事に追われる身では学びたくてもなかなか難しく諦めていましたが、結婚を機に神戸に住むことになり、運よく夫が手堅い会社に勤めているのをいいことに、思い切って念願の大学院に入学することにしました。資格審査で博士後期課程から入学できたので、なんとか神戸から2時間近くかけて通学しながら家庭と研究の両立を目指すことができました。

約10年ぶりの学生生活は新鮮で、学生食堂でランチを食べたりするだけでちょっと感激、学割で映画を観るだけで感激、講義室で授業を受けては大感激といったところです。私の浮かれようは友人達にも飛び火し、大学院進学を真剣に考える人も出てくるくらいです。また、私が所属するゼミの博士後期課程には留学生が多くいろいろな文化にも触れることができます。昨年、学会の研究会で北京へ行き、その足で内モンゴルから来た留学生の故郷に連れて行ってもらいました。とてもなく感動的な草原を堪能しました。研究室での出会いがなければ、こんなところには一生行くことができなかっただと思います。

そして今年の4月7日に娘が生まれました。片時も離れたくないと思うぐらい、可愛くて可愛くでしょう

がない存在です。その願いがみごとにかなってしまいました。まったく哺乳瓶を受け付けず母乳命の、ひとに預かってもらうことが難しい赤ちゃんになってしまいました。ですので、どこへ行くのもバギーをガラガラ押して出かけます。時には新幹線に乗って日帰り東京出張します。学会や研究会などもバギーを横づけしています。大学生活においても先生をはじめ研究室のメンバーにはいろんな面で依存させて頂いています。ゼミにも一緒に出席させて頂き、研究室のソファはおむつ台、研究室の隅っこで授乳、勝手にベビールーム化しています。妊娠期や産後すぐの体調の良くない時には研究室のメンバーがいろいろ気遣ってくれて研究・調査においてもサポートしてくれました。温かく私たち親子を見守ってくれる研究室の皆さんには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

大学生活をあらためて書いてみると、どうしてもまわりの方々への感謝状になってしまいます。「モラトリアム」軍団は、多くの人に支えられない立つてられないふわふわした存在です。私が大学生活を続けられるのは、皆さんに支えてもらっているからです。感謝の気持ちを忘れずにこれから的学生生活を謳歌していくたいと思います。これからも親子ともども、どうぞよろしくお願ひいたします。

聴覚障害者の大学生活



社会基盤工学コース
博士前期課程2年

高橋 保裕

皆様、こんにちは。

研究室で遊び呆けていて、ふと気付けば背後に先生。怒鳴り声の代わりに、笑顔で「構築会たよりの原稿を書け」。そんな訳でいま原稿を書いています。テーマは「聴覚障害での大学生活」。

さて、私は、聴覚障害者です。

正式には聴力障害(6級)と言い「高難度聴」に分類されるのですが、皆様にはなじみのない区分だと思

います。具体的な例でいうと、電車がホームに入る音がようやく感じられる程度、会話では怒鳴り声や叫び声がようやく聞こえるレベルを指して言います。当然、音声だけだとほとんど何も聞こえないため、この他に目線や唇の動きを読み、補聴器の力を借りて会話をしています。

それでは大学生活も辛いのではないか、という心配をよくいただきますが、これについてはNO。不便はあっても不幸ではなく、大学／大学院生活を振り返ってみて、実に楽しい6年間でした。先生方や、障害者支援室の方々、学友などに恵まれたと思っています。

一方、大学生活の上でどうしても不便な点もあり、周囲の負担を求めざるを得ない事があります。そのため、はじめて会う人には、必ず次の3つをお願いしていました。これはおそらく聴覚障害者全員に共通する問題だと思いますので、今後皆様が聴覚障害者と接する機会があれば、思い出して頂ければ幸いです。

1つは、背後からの音は全く聞こえないため、声をかけて気づいていないと思ったなら肩を叩いて欲しい、ということ。2つは、口を隠されると全く音が分からなくなるためマスクや会話中に口を覆う事は避けてほしいこと。そして最後に、集団競技については参加しないがどうか理解してほしいこと、です。

1と2については、たぶん直感的にご理解いただけると思います。3つ目なのですが、これは音が聞こえない事による事故を恐れてのものです。昔の話ですが、聴覚障害者が健常者に交じって野球をしていた時、掛け声が聞こえずにチームメイトと衝突事故を引き起こして責任問題になったことがあります。どうしても聴覚障害の場合、集団競技にはこういう類の怖さがあります。

幸いにして私の場合、以上の点について周囲の理解を得ることができ、衝突することもなく大学生活を半ば終える事ができました。これは本当にありがたいことで、理解し受け入れて下さった周囲の皆さんに心からの謝意をささげて、この文の締めにしたいと思います。

※聴覚障害者も人によってまちまちで、運動好きの人も当然居ます(練習や合図に様々な工夫を行い、聾学校がソフトボールで全国大会出場したケースもあります)。音楽や運動については、人によってスタンスが大きく異なるため、本人に確認して下さい。

感性を磨くこと



建築工学コース
博士前期課程2年

古賀 茉季

ここ数年の私の興味は、「いかに自分の感性を磨いていくか」である。

建築を大学で学び始めて今年で6年目を迎える。大学4年の時、広い建築の分野の中でも計画設計を専攻すると決め、今まで様々学んできた。その中でずっと考えていることは、自分は本当に設計に向いているのか、ということと、設計に必要な感性はどうしたら身につくのかということだ。設計をする際にどこからともなく沸いてくるアイディアの源は一体何なのか、その源がもっと増強されれば私の設計ももっとよくなるだろうにと常に頭のどこかで考えている。私はアイディアの源はすなわちその人の感性だと思う。感性は今まで生きてきた過程でほぼ決まっているのではないだろうかと考える事もあるが、そう考へては今後の自分の発展がないので、最近はいかに自分の感性を今以上に磨いていくかということを考えている。

感性は意識的に磨けるものではないかもしれない。しかし、私はそれを少しでも磨くために、とにかく色々なものに直に触れるということを意識し、実行している。例えば、建物を雑誌や写真で見るのではなくなるべく実際にその空間の中に身をおくことによってその場所から自分が感じるもの、特に写真等には表現されていない音や空気感やその場の人の活動を含めた建物空間全体を感じることを大切にしている。建築に直接かかわることでなくても、日本各地やあらゆる国に旅行に行き、そこで生活する人々や自然、建物や伝統芸能まで様々見ることによって、色々な発見や感動をし、そういう経験の積み重ねこそが、自然と自分の設計にいきつてくるのではないかと思い、常にフットワークを軽くして活動している。

来春からは実際に設計者として社会貢献をしていく立場となり、学生の間行ってきた夢ばかりの設計とは違う、現実の建物の設計をしていかなければならなくなる。その時に、それまで積み重ねてきた様々な体験

が本当に効果を発揮するのかはわからないが、自分の身をもって体験し感動することは、設計というものに限らず、ひいては自分の人間としての器を大きくすることにもきっとつながると信じている。そういった面では、感性を磨くことは、例え今までの長い学生生活が終わり実際に社会に出て実際の建物を創っていく立場になっても、一生続けていきたいと思う。

しかし当面は、残り少ない学生生活を有意義に使うべく、様々な新しい刺激を求めて日々精進していく。しかし当面は、残り少ない学生生活を有意義に使うべく、様々な新しい刺激を求めて日々精進していく。

半年が過ぎて



社会基盤工学コース
博士前期課程 1年
吉浪 泰祐

大阪での生活が今春で5年目を迎えました。大学院に進学したことから一気に世界が変わった、とまではいきませんが、研究室に入ってから、今までの生活と比較して目新しいこと、自分に足りないことなどと様々な形で遭遇しています。今回、原稿を書くにあたり、私の最近の生活について書かせていただこうと思います。

私は輪荷重走行試験機を用いた床版に関する研究チームに所属しています。まずこの試験機が大学4年生で研究室に入った際の驚きの一つでした。実は学部3年生まで現物を見たことがありませんでした。この試験機では実際の床版が壊れていく様子を見る事ができるため、座学では知識程度で、どうも漠然としたものを自分の眼で確認できます。この研究は大阪大学をはじめとし、様々な研究機関で実験等が行われているため、資料には不足しません。また、床版研究に関わる方々とお話しする機会があり、床版に関する知見を吸収する機会も多くあります。ただ、お話を聞くだけで吸収しきれない、という気持ちがぬぐいきれないのも事実です。せっかく滅多に使えない試験機を使い、研究に関わる多くの方々からお話を聞く機会があるのであるのですから、もっと有効活用すべきと痛感し

ております。

普段の私の一日の生活は平日・休日関係なく輪荷重走行試験機を中心に回っています。特に、5~7月初旬までは一応私の担当ではない試験体を私がメインで担当することとなり、人数もかなり限られているため、ほとんどつきっきりで試験に関わっていた状態でした。といってもM1では当然授業もあるため、平日の昼間は授業が中心です。大学院では幅広く授業を受けよう、と多くの授業を最初に選択しました。ですが、気づいたら自分の専門に関係のある分野+計画系ばかりになり、1セメスターは最初の意気込みはどこにいったのやら?という結果に終わっています。ただ、友人とお互いの研究のことや研究室の話題を話すなど、授業で得られる知識とは別に情報交換の場所にもなっています。授業で得られるもの+ α のものがあったと感じています。単純に私の考えが足りなかった場合がほとんどですが、全く思いつかなかった考えも少なくなく、日々の雑談の中でも有益な情報が多くつまっているものと改めて実感しております。

こんな日々を過ごして気づいたらもう半年が過ぎました。新たに入ってきた4年生の後輩も定期測定等の作業がある程度できるようになりました。今後は試験についてはもう少し楽になるかな、と期待を抱きつつ滞っている自分の研究を早く進めなければと焦っているところです。自分の研究が思いっきり欠落し、授業・試験機・研究のバランスが取れていなかった半年、反省すべき点が多く、相対的にはマイナスです。ただ、得られたものも多く、今度こそプラスとなる後半戦にしたいと考えております。

今回構築会だよりの原稿を依頼された際に担当の先生から指名された理由をお聞きすると、「話題に事欠かないから」という趣旨の言葉をいただきました。どうやら先生の所属している研究室では私は何故か有名人らしく、選考理由はそのためだそうです。有名人という言葉はさておき、話題に事欠かないとはどういう意味だろう?と、この原稿の最後になんでも考えていく次第であります。

レッツ異文化交流



建築工学コース
博士前期課程1年

神野 夏子

この夏、一ヶ月間アメリカに行ってきた。大学の授業である、「工学英語Ⅱ」の夏期特別プログラムなるもので、「理工系大学院生のための海外研究発表研修コース」というなんだかたいそうな名前がついている。

これを書くにあたって、向こうの授業で使っていたノートをめくってみた。授業でとったメモなどの他に、行った場所のチケットが貼ってあったり、その感想などもついでに書いてある。なつかしいなあと思いながらついついめくっていると、ぎょっとする言葉を見つけた。「ばかやろー！！」・・・思い出した。私はこの頃、自分の書いた卒業論文にいろいろしていたのだ。このプログラムの大きな目標は、自分の卒業論文を英語に直し、最後に英語でみんなにプレゼンテーションするというものだ。工学部のなかでも様々な専攻の人が参加しているこのプログラムでは、他の専攻の人にもわかるように分かりやすくプレゼンテーションを組み立てるということがとても重要になる。そこで授業では、何回も授業中にとなりの人と自分のプレゼンテーションについて議論をした。建築工学専攻の中でも計画系に属している私は、工学部に属していないから理系論文というものにほとんど触れたことがない。物理や化学なんて1回生のときの教養科目以来。そんなんだから、誰のプレゼンテーションを聞いてもチンパンカンパンで、みんなにイチから説明してもらわなければならなかった。ある意味、それは立派な異文化体験で、結構面白かった。しかし欲を言えば私も説明したかったのだ。この「ばかやろう」を書いた日、私はペアの子に自分の論文について「なんか高校生むけってかんじ・・・」と言われたのだ。彼にまったく悪意はない。非もない。たぶん、もっと難しいことを書いてもまだ分かるよって言ってくれただけだと思う。しかし、残念なことに、私の論文にはこれ以上の深みはなかったのである。

深みがないと気づいたものの、当然のことながら

今さらどうすることもできない。先生や友達に相談してアドバイスをもらったり、ホームステイ先の家族にプレゼンテーションをきいてもらったり、研修最終週にはほぼ毎日睡眠時間を削って何とか最後まで仕上げた。まさかアメリカで、睡眠時間を削って勉強することになろうとは行く前は考えもしなかった。

もちろん、楽しいこともたくさんあった。放課後や休日は、近くのビーチで開催されるコンサートで踊りまくったり（運動音痴の私が・・・異国の地じゃないとできなかった）、映画館で「Mamma Mia!」を見ながら大合唱したり。私は、どこぞこの国の国民性はどうこうとかいう話には疑問があるけれど、アメリカ入ってみんな気さくで陽気だなあと思わずにはいられなかった。

しかし予想外に価値があったのは、一緒に行った30人あまりの新しい友達が出来たことだ。大学院生にもなると、なかなか新しい友人もできないものだが、道端であって「よっ！」とか言える人が増えたことはすごく良かったと思う。

ま、何はともあれ、思い出は大切にしつつ、来年はぜひとも深みのある修士論文を書いて卒業したいと思っている今日この頃である。

部活一色の時間



社会基盤工学科目
4年

山本 康輔

僕は大学に入って、「テニス部に入ろう」と決めていました。高校からテニス部でテニスをやっていたので、大学でもやりたかったからです。たくさんテニスサークルもありましたが、真剣にテニスがしたかったので体育会の部に入部することにしました。それから今までの4年間は部活によって支配されていたといつてもいいくらい部活関係の時間が大半を占めました。また部活関係で関西学生テニス連盟という関西の体育会の試合を運営する組織に入りました、というよりも

入れられました。こちらも忙しいときは練習もできず、勉強もできず、寝る時間もままならないといったハードな組織でした。こんなこともあり、試験前はきつかったです。なんとか単位は取得してきました。ギリギリでしたが・・・

こういった部活中心の生活を送っていて部活が自分で欠かせないものになっていました。しんどくてやめたくなったときもありましたが、続けていてよかったです。なぜならテニスができただけでなく、同期の友人、先輩、後輩がいたからです。楽しいときもしんどいときも一緒に過ごしてきた自分にとってかけがいのない存在です。そういった中にいるのがとても居心地がよくて、自分の居場所がそこにはあったように思います。今、4年生で引退まであと少しの時間しかありません。黒く焼けた肌も、手にできているたこも、肩の痛みもう少しで自分からなくなってしまいます。そう考えると寂しいと感じる自分がいます。しかし、自分で大阪大学硬式テニス部にいたことを大切にしていきたいと思います。残された時間もあと少し、最後までがんばっていこうと思います。

ニュータウン育ち



建築工学科目

4年

若林 可奈

私は7歳の時に現在の家に引っ越しました。それからずっと、22歳になる今日までニュータウンで育つて来た私の「ふるさと」は、ニュータウンなのだと思います。そんな私にとってニュータウンが抱える課題とやらに取り組むことは、研究以上の意味を持っています。

3回生の夏、建築の同級生3人と私は「海外研修助成金」を勝ち取り、10日間イギリスのニュータウン(Harlow New Town)に調査に行かせていただきました。イギリスのニュータウンは街並みがきれいで、そのきれいな街並みを守ろうという住民の意識が大変高くて驚きました。同時に、住環境の維持形成に関

しては、自治体のリーダーシップの担う役割が非常に大きく、日本とはすいぶん状況が違うと感じました。

その一方で、事前調査や帰国後の報告会で出会った、新千里東町「街角広場」のみなさんは私の想像以上に自分たちの生活の場である千里ニュータウンに興味を持っていました。私たちの、イギリスのニュータウンについてのつたない発表にも熱心に耳を傾けてください、自分の住むまちについてきちんと知っていて、考えようとしている人たちが日本にもたくさんいたのです。日本のニュータウンにはイギリスのようにしっかりとした自治体のバックアップは今のところありませんが、一部の住民の意識とモチベーションはイギリスと変わりませんでした。

この経験がきっかけで私は現在の研究室に入り、郊外住宅地の住環境について研究していくことに決めました。

そしてこの夏、今回は神戸大学、清水建設との共同研究のための海外調査として、アメリカの郊外住宅地(Greenbelt, Levittown)に同行する機会をいただきました。イギリスの非常に閑静な雰囲気とはまた違って、アメリカでは、夕方になると、おびただしい数の車がsuburbiaの駅の駐車場から出て行きます。会社帰りの住民たちの車なのですが、それは日本の帰宅ラッシュの電車ながらに混沌とした風景でした。しかし、住環境を守るために自治体や、Greenbeltではco-op法人、住民によるCommittee、NPO等々実にさまざまな人たちが、さまざまな組織をさまざまな方式で運営し、たがいに協働していました。

日米英の郊外住宅地の現状を見るにつけ、日本のニュータウンでできることがまだあると感じています。それが、「コミュニティ・カフェ」なのか、管理や自治の仕組みなのか、コミュニティ・ミュージアムなのか、官の力なのか、住民運動なのか、まだわかりませんが、それはこれから2年半かけて考えていきたいと思っています。

というわけで、ニュータウンで育つて、ニュータウンの問題を自分の問題として考えられる私だからできることを、いつかどこかで形にしたいなと思いながら、私はここで勉強しています。

三回生になって



社会基盤工学科目
3年

神田 真太郎

大阪大学に来て、三年目の半ばに差し掛かりました。いよいよ、来年から研究室に配属され、2年間を過ごしたクラスと別れるようになるのだと考えると少し寂しくも思います。毎日、講義と課題に追われる日々を楽しく過ごせたのは、一緒に頑張る仲間がいたからだと感謝しています。以前、工学倫理の授業で阪大土木のOBの方に話を聞いていただいた時、『大学中はとにかく友達を作つて下さい』と言われていました。昔の私なら軽く聞き流していたでしょうが、最近は大学・パート・夏季実習先など多くの場面でそれの大切さが分かる気がします。

その一つとして、今年は海外研修助成というものに友達から誘われました。これは、グループで研修したい内容を総長の前でプレゼンし、上位2グループは大学から研修予算を一定限度額まではもらえるといふのです。私は、私を誘ってくれた友達と今まであまり話したことのない建築・船舶の友達3人の計5人のグループに入れていただきました。私たちは『サンフランシスコのNPOに学ぶ技術者の社会貢献』というテーマでこれに参加しました。テーマをあっさりと決めたのはいいものの、テーマが大きく難しかったので一つ一つを進めるのに非常に苦労しました。授業の合間にねっては集まり、話し合い、資料を集め、先生に相談し、直接豊中のNPOを訪問したこともあります。皆が自身の勉強も忙しいなか、リーダーを筆頭に互いを信頼して個々の役割を進めていったので最後までやり遂げられたと思います。結果としては、今年から導入された書類審査で落とされるという最悪の結果でしたが、私はもし友達が誘ってくれなければこのメンバーと仲良くなることがなかったのかもしれないと思うと不思議な気持ちになり、また誘ってくれた友達に感謝しています。きっと、何年後に逢っても『あの時の海外研修助成くやしかったな』と語れると思います。

高校・中学時代にはほとんどの友達が学校の中といつても過言ではありませんでした。大学に入り、様々な場所で、付き合いの深い浅いは関係なく、友達が多くできました。ですが、私はまだまだ友達を増やす真っ最中です。大学生活中、これから多くの友達を作り、刺激され、自身の成長にもつなげられていたらと思います。』

星に願いを



建築工学科目
3年

栗本 紗子

7月上旬、設計課題の図面提出期限も近づいて、なんとなく活気付いてきた製図室に笹の葉が持ち込まれた。多くの時間を仲間とともにすごす、見慣れた製図室にいきなり現れた夏の風物詩は、異様な空気を発しながらその存在感を示していた。願い事を書こうと用意してくれた短冊を手にして、本気で星に願いをこめていたかつての自分と、心から願うことが見つからない今の自分の大きな差に気がついた。

「ダンサーになりたい」「学校の先生になりたい」「スチュワーデスになりたい」

幼い私の願いはいつも将来の夢で、しかも毎年ころころ変わったけれど、どの願いも本当だったし、どの願いも本当に実現すると思っていた。自分の未来は無限に広がっているものだと信じて疑わなかった。今の私だって、自分はまだまだこれからの人間だと思っているし、これから学ぶべきことや実現すべきことは山のようにある。大学で建築を学ぶ私にとって、建築士という、おそらくは昔の夢よりもっと実現可能で、近くまで迫っている夢もあるはずなのに、どうして心からそれを願う気持ちになれないんだろう。どうしてこんなに希望が持てないんだろう。

かつて、高校生までの私は無敵だった。怖いものもなかったし、自分にできないこともないと思っていた。たとえ今の自分にできないことがあっても、それは願えば努力次第で実現できると信じていたし、実際

できた。それなりに要領もよく、ちゃっかり者の私は、確実に自分が実現できることだけを願っていたのである。そして確実に課題をクリアしていく、周りにおだてられ、自分無敵説を確立していった。ただ天狗になっていたといえばそれまでだけれど、たぶん私は今よりずっとピュアだったんだと思う。「願えば叶う」と信じて、また叶えようとする努力を惜しまなかった。私はたくさんの希望と夢に囲まれて、毎日をまじめに、着実に過ごしてきた。

ところが、大学に入って新しい環境に身をおくようになってから、すべてが少しずつ、しかし確実に変わっていった。隣の人が当たり前のようにやっていることがなぜか私にはできない。私より努力してハードに毎日を送っている人がいる。自分の意見をそのままストレートに伝えることができる人がいる。小さな挫折を味わったり、新しい意見を聞いて自分の考えを改めたりという、今までしてこなかったことをせざるを得ない状況のど真ん中にいつの間にか立たされていた。新鮮で刺激的な毎日の内で、いろんな人と話す機会も多くなった。私はちょっぴり大人になって、一人では生きていけないことを知って、さみしがりやになって、周りにいてくれる人に感謝できるようになった。そして自分の力ではどうしようもないことがあることを知って、願っても叶わないこともあるということがわかつて、願い事をする自信すらなくしてしまった。

もう少し時間がたって、このちっぽけでどうしようもない自分ともう少し上手に付き合えるようになったら、また前とは違う形で自分に自信が持てるだろうか。そのときにはまた、素直な気持ちで、星に願い事ができたらいいのにと思う。

前期回想記



社会基盤工学科目
2年

阪本 浩章

入学して無事に1年目が過ぎ、今年からキャンパスは豊中から吹田に移ってきました。一年生の時と比

べると、大学は家から近くなり、授業のコマ数は（前期は）かなり少なかったので、何かと忙しかった1年の時からようやく解放され、やっと自由時間が多くなり、いわゆる大学生らしい大学生の幕開けかと思って、期待していました。ところが、現実はというと・・・。今回はこの2年生前期のことを振り返ってみようと思います。

まず、4月に授業が開始。授業数自体は多くはなかったので、学校に通うこと自体はまったく問題なかったのですが、如何せん宿題・課題・予習がとにかく多く、それに追われる日々も同時にスタートすることになったのです。何事も要領の悪い僕は早速苦しむこととなりました。こなしたとききや、次々に襲いかかってくる課題たち。4月から新たに始めたアルバイトがさらに僕に追い打ちをかけます。なかなか慣れないアルバイト・学校の勉強パターン。こんな僕は、なんとか4月を乗り越えました。

5月には、どうやら五月病なるものを発病したような感じっていました。なぜかどうもやる気が出ないという状態が続いていました。症状の名前は“五月病”なのに、なぜかこれが6月まで続いていました。この6月には、勉強してもテストで結果が出ないことが多かったので、ますますやる気が低下していました。与えられた最低限の課題のみをこなしてそれでおしまい、という日々の連続でした。

5月、6月を乗り切れたのは、学校で友達としゃべることでストレスを発散できたからのような気がします。やはり他人とのコミュニケーションに秘められた力というのはストレスを消し去るほどにすごいのでしょうか。なにはともあれ、どうにか5月、6月を乗り切ったのです。

そしてついに7月に突入しました。なんだかんだ言いつつもテストが近いという状況に・・・。このままではいけないということで徐々にやる気を取り戻していくことになったのです。ただし、勉強しても結果が出ないことは6月からなんの変化もなかったわけですが。テスト1週間前には、全然わからないなどの泣き言を言っていたのですが、ようやく努力が報われ始めたのか、テストはまあまあできたような感じでした。とある1教科を除いては・・・。

以上の様に、苦しみの多かった前期は幕を閉じたの

です。果たして無事に単位の修得はできたのでしょうか。結果はまた後日わかれることになります。前期の苦悩や、過去・未来を含めたあらゆる経験は、いつかまた同じようなことが起こったときの役に立つと考えることで、今後も自信を持って生きていきたいと思います。

ハタチ



建築工学科目
2年

光田 めぐみ

大学生になってまさか夏休みの宿題に追われるとは思っていなかった。昔から夏休みの最後に残る宿題は絵と作文。私はこういった宿題が苦手だ。しかし、苦手だからといって避けていてはいつまでたっても苦手のまま。それを克服するために引き受けたこの宿題。何について書こうか…こうやって本題に入らず、ぐだぐだ書いているうちに1000字に達せばいいのに…。

この夏、私はハタチになった。「ハタチ」という響きにどこか焦りを感じた。ついに大人になってしまった。しかし、私たちは学生である間、猶予が与えられている。こういう期間を「モラトリアム」というらしい。まだ自由な時間の多い学生のうちにもっと多くの経験をしておきたい、やっていないことはたくさんある、理系はどんどん忙しくなるなら今しかない。そう思った私の夏休みは怒濤の2ヶ月だった。

初めての海、初めてのキャンプ、初めての一人旅、初めての海外旅行。どれも今まで興味もなかった、というより誘われても断っていたようなことだった。それから大学生なったらやろうと思っていたことにも挑戦した。スポーツジムへの入会、香川へのうどんツアーや、漫画「ワンピース」を揃えること。実家にだって3回帰った。ディズニーランドにもUSJにも行った。そして残りの日々はバイトに注いた。

本当は家でゴロゴロして過ごすのが好きな私、よくやった。充実した、無駄のない夏休みだった。

私の「やりたい！行きたい！」といった思いつきの企画には、多くの友人たちが付き合ってくれた。それなのに、言いだしちゃの私は、様々なことに手を出しそうで忙しく、直前まで計画を練ることができず、いい加減な計画しか立てられなかった。それでも、「みんな」となら成功した。楽しかったし、何でも乗り越えられた。しかし、そううまくはいかないのが一人旅。調査不足のため、いったん計画が狂うと代替案もないし、時間もうまく使えない。そういう時に生まれる不満や歯がゆさも全て内に秘めて旅を続けなければならない。感動を共有したい、困難だって笑って乗り越えたい、喜怒哀樂を前面に出したい。結局、私は一人では楽しめない人間なのだ。巻き込まれる私の友人は大変だ。

そう、今まで私に巻き込まれてきたのは家族だ。私はマザコンのファザコンのシスコン。末っ子次女の私はずっと家族に甘えてきた。しかし、ハタチになって「自立」という言葉が一気に迫ってきたように感じる。嫌だ。いつまでも甘えていたい、大人になんかなりたくない、ワガママが許される子供でいたい。けれども私も、社会的に近々大人にならないといけないらしい。私の中ではまだ『大人になるという義務』よりも『子供でいたいという願望』が強く、私を混乱させる。

さあ、いつまで私は子供でいられるか。現在モラトリアム中。残された大学生活をいかに楽しみ、苦しみ、笑い、悩み、学ぶか。今こそいろいろな経験を積む時だ。モラトリアムを有効に使えた人が、立派な大人になる気がする。そういう経験ができるチャンスは逃さず、自らチャンスを作っていくじゃないか！

この脈絡のない文章を最後まで読んでくださってありがとうございました。何が言いたいのか…ハタチの頭の中のゴチャゴチャをなんとか文章にしてみると、こんな風になってしまいました。まだ頭の中が整理できておらず、結論にたどり着けていないのです。私なりに大人になれたと思うときに、この文章を読み返してみたいと思います。

章末 本題

2008 年度構築会役員会報告

日 時 :	2008 年 6 月 2 日 (月) 17 : 30 ~ 19 : 00
場 所 :	社団法人中央電気倶楽部 215 号室
参加人数 :	33 名

主な議題 :

1. 2007 年度事業報告・会計報告

(1) 本部事業報告・会計報告

玉井幹事長、向出幹事、猪井幹事より、本部 2007 年度事業報告、会計報告があり、了承された。

(2) 支部事業報告・会計報告

東京支部・高久幹事長、愛知支部・矢野支部長、大阪支部・山口幹事長、兵庫支部・岩橋幹事長、広島支部・坂手支部長より、各支部の 2007 度の事業報告と会計報告があり、了承された。

2. 2008 年度役員選出

会長に昨年度副会長の福田氏 (C73)、副会長に橋本氏 (A72) が選出された。監事に松村氏 (C91)、向井氏 (A91)、幹事に松原氏 (A98)、2008 年卒業生代表役員に矢田氏と岩本氏がそれぞれ選出された。

3. 2008 年度事業計画案・予算案

(1) 本部事業計画案・予算案

玉井幹事長、猪井幹事より、本部 2008 年度の事業計画案、予算案について説明があり、原案通り了承された。

(2) 各支部事業計画案・予算案

各支部より事業計画案、予算案についての説明があり、原案通り了承された。

4. 構築工学科創立 60 周年記念事業

中辻実行委員長より、事業報告があった。

5. その他

玉井幹事長より、構築会名簿のウェブ化検討についての提案があり、2008 年度名簿配布時に、会員各位に対してアンケート調査を実施することになった。

井上会員 (A57) より提案された旧制浪速高等学校寮歌「浪速の友に」の構築会たよりへの掲載について了承した。

【幹事長 玉井 昌宏 (C85) 記】

◇2007年度 会計報告◇

(2007年5月1日～2008年4月30日)

●収入の部

	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績	2007当初予算
会 費	6,354,270	5,077,520	4,840,636	5,581,710	4,836,050	7,705,110	4,375,660	5,000,000
広 告 料	559,160	718,740	438,845	419,340	379,380	379,220	359,370	380,000
利 息	1,437,089	5,152	57	422	4,408	2,569	3,562	0
寄 付 金 他	0	0	0	0	100,000	0	0	0
そ の 他	0	0	54,000	0	10,005	11,000	12,000	0
単 年 度 小 計	8,350,519	5,801,412	5,333,538	6,001,472	5,329,843	8,097,899	4,750,592	5,380,000
前 年 度 繰 越	6,730,119	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594	5,562,594
收 入 計	15,080,638	14,314,021	11,873,233	12,176,645	9,876,960	12,950,431	10,313,186	10,942,594

●支出の部

	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績	2007当初予算
名 簿 印 刷 費	2,384,130	4,126,710	2,106,696	4,115,679	2,230,000	3,510,000	2,152,500	2,000,000
名簿発送手数料	0	0	0	0	0	0	0	0
郵便通信費	143,263	170,447	77,764	86,126	95,511	223,170	75,923	100,000
謝 金	390,000	285,000	312,000	322,000	312,000	322,000	339,500	320,000
記念品代	246,780	243,660	124,330	153,580	186,061	257,375	209,129	260,000
支部援助金	1,658,300	1,823,450	1,697,450	1,678,100	995,800	1,744,800	788,500	1,250,000
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	600,000	600,000
行 事 費	579,503	0	0	0	0	0	400,000	400,000
会 合 費	83,795	239,335	405,500	197,400	228,820	230,084	241,354	250,000
出 張 費	59,760	0	59,760	47,400	61,160	59,960	61,160	60,000
慶弔費	95,602	63,300	105,833	215,890	66,600	66,600	45,738	150,000
備 品	0	0	0	0	0	0	0	0
消 耗 品 費	13,651	13,604	462	1,218	18,045	2,832	6,652	10,000
振替手数料	11,130	8,820	8,265	12,135	3,891	3,341	1,050	10,000
会費滞納分催促費	102,115	0	0	0	0	167,675	0	0
そ の 他	0	0	0	0	26,540	0	0	0
支 出 計	6,568,029	7,774,326	5,698,060	7,629,528	5,024,428	7,387,837	4,921,506	5,410,000

	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績	2007当初予算
残 高	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594	5,388,272	5,532,594

●繰越金内訳

	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績
定額貯金	5,200,000	5,204,990	5,204,990	4,200,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000
郵便為替	503,140	2,930	32,620	5,870	11,800	295,090	8,750
郵便貯金	2,126,325	1,174,118	438,308	0	2,422,402	2,728,853	43,552
銀行預金	631,755	30,584	439,442	340,023	339,404	436,231	3,110,184
現 金	51,389	127,073	59,813	1,224	78,926	102,420	225,786
合 計	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594	5,388,272

賛一員効率開

◇2008年度 事業計画◇

事業項目	実施時期
1. 構築会たよりの発行・配布	2008年11月頃
2. 記念品の贈呈 卒業者、新規修了者（シャープペンシル） 卒業30周年の会員（タイピンorネックレス）	2009年3月 随時
3. 支部活動への補助	2009年3月
4. 社会基盤・建築工学教室への寄付	2009年3月
5. 役員会の開催	2008年6月2日
6. 「構築会を考える会」の開催	随時
7. 名簿のウェブに関する検討	随時

◇2008年度 予 算◇

●収入の部

	2008年度予算	備考	2007年度実績	2006年度実績	2005年度実績	2004年度実績	2003年度実績
会費	5,700,000	2004年度会費納入実績と督促実施を考慮	4,375,660	7,705,110	4,836,050	5,581,710	4,840,636
広告料	360,000	前年度並み	359,370	379,220	379,380	419,340	438,845
利息	0		3,562	2,569	4,408	422	57
寄付金他	0		0	0	100,000	0	0
その他	0		12,000	11,000	0	0	54,000
単年度小計	6,060,000		4,750,592	8,097,899	5,329,843	6,001,472	5,333,538
前年度繰越	5,388,272		5,562,594	4,852,532	4,547,117	6,175,173	6,539,695
収入計	11,448,272		10,313,186	12,950,431	9,876,960	12,176,645	11,873,233

●支出の部

	2008年度予算	備考	2007年度実績	2006年度実績	2005年度実績	2004年度実績	2003年度実績
名簿印刷費	3,000,000	前々年度並み	2,152,500	3,510,000	2,230,000	4,115,679	2,106,696
郵便通信費	100,000	平年並み	75,923	223,170	95,511	86,126	77,764
謝金	320,000	平年並み	339,500	322,000	312,000	322,000	312,000
記念品代	200,000	昨年度並み	209,129	257,375	186,061	153,580	124,330
支部援助金	1,200,000	昨年度並み	788,500	1,744,800	995,800	1,678,100	1,697,450
教室寄付金	600,000	昨年度並み	600,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行事費	0	実施予定なし	400,000	0	0	0	0
会合費	250,000	平年並み	241,354	230,084	228,820	197,400	405,500
出張費	70,000	平年並み	61,160	59,960	61,160	47,400	59,760
慶弔費	150,000	平年並み	45,738	66,600	66,600	215,890	105,833
備品	0		0	0	0	0	0
消耗品費	10,000	平年並み	10,060	2,832	18,045	1,218	462
振替手数料	10,000	平年並み	1,050	3,341	3,891	12,135	8,265
会費滞納分催促費	150,000	前々年度並み	0	167,675	0	0	0
その他	0		0	0	26,540	0	0
単年度小計	6,060,000		4,924,914	7,387,837	5,024,428	7,629,528	5,698,060
次年度繰越	5,388,272		5,388,272	5,562,594	4,852,532	4,547,117	6,175,173
支出計	11,448,272		10,313,186	12,950,431	9,876,960	12,176,645	11,873,233

構築会役員一覧

会長 福田 保 (C73)

副会長 橋本 彰 (A72)

監事 松村暢彦 (C91) 向井洋一 (A91)

幹事長 玉井昌宏 (C85)

幹事 猪井博登 (C99) 松原茂樹 (A98)

学年委員

土木		建築	
1950			
1951	木田五一郎	伊藤俊夫	
1952	竹山喬	木村康彦	
1953	高野浩二	大久保昌一	
1953	濱宏	片倉健雄	
1954	松山巖	杉原正昭	
1955	堤道夫	荒木兵一郎	
1956	波田凱夫	山田俊満	
1957	広内徹	秦洋一郎	
1958	豊島良三	脇山広三	
1959	上根善教	金田宏	
1960	小野敦	藤井象一	
1961	村上昇	真塚達夫	
1962	榎木通男	入江恂一	
1963	松井保	中江新太郎	
1964	濱田圭一郎	森田晴美	
1965	島田壮八郎	小島孜	
1966	宇野剛正	川畑幸一郎	
1967	梶川靖治	竹嶋祥夫	
1968	谷口剛也	香西喜八郎	
1969	武内一彦	大津俊雄	
1970	阿部信晴	木林長仁	
1971	伊藤伸司	角彰	
1972	木村正二	森田孝夫	
1973	森永勝登	木村修治	
1974	青木利博	巽昭夫	
1975	富士川洋一	家倉泉	
1976	長谷川善信	鈴木克彦	
1977	蓮輪賢治	古宮嘉之	
1978	後野正雄	吉村英祐	

土木		建築	
1979	正田正一	有坂伸二	
1980	辰谷義明	多田元英	
1981	戸上拓也	菅原正晴	
1982	中田憲正	山中俊夫	
1983	山辺建二	丁野成人	
1984	藤田眞	板田昌彦	
1985	玉井昌宏	杉本正三	
1986	山内一浩	桐野健治	
1987	武藤和好	芦田智之	
1988	鍋島康之	椎名辰之	
1989	小野正博	川合通裕	
1990	山見晴三	中塙光一	
1991	村上茂之	向井洋一	
1992	小野潔	岩井潔	
1993	大西弘志	若松達史	
1994	神田忠士	澤井祥晃	
1995	荒木進歩	西豊	
1996	松本忠	田中聰	
1997	山内淳平	八木秀樹	
1998	木村充	橋本武士	
1999	下村公一郎	寺前隆	
2000	内田美範	多田正治	
2001	橋本保則	軸丸久司	
2002	竹口直樹	山本訓久	
2003	蒲原武志	藤本正基	
2004	青木康素	柴田景太	
2005	窪田勇輝	川島尚教	
2006	宮田亮	竹島健一朗	
2007	峯澤博行	堀本明伸	
2008	矢田尚樹	岩本卓麻	

支部役員一覧

【日本式語文】

大阪支部 支部長 綿谷茂則(C73)

副支部長 沢田隆志(A72)

副支部長 中平明憲(C77)

幹事長 山口博章(C81)

愛知支部 支部長 矢野修一(C74)

副支部長 青木伸一(C81)

幹事長 降幡達生(C83)

東京支部 支部長 上阪恒雄(C70)

副支部長 高井正行(A77)

幹事長 高久雅喜(C84)

兵庫支部 支部長 志波秀明(C71)

副支部長 中山久憲(C73)

幹事長 岩橋哲哉(C81)

広島支部 支部長 坂手道明(C71)

副支部長 芥川省三(C74)

幹事長 増田伊知郎(C80)

【大阪支部たより】

第一回 勉強会

構築会会員の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお慶び申し上げます。また、平素は、大阪支部の活動にご理解、ご協力を賜りまして、厚く御礼申し上げます。

さて、大阪支部では、昨年度に役員改選を行いまして、新体制となってから今年度で2年目を迎えることとなりました。

昨年度につきましては、諸般の事情により、総会・懇親会等を開催することができず、皆様には残念な思いをさせてしまいましたことに、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

今年度は昨年度の分まで盛大に行うべく、役員一同、心を新たにしているところであります。

11月14日には、平成21年3月20日に開業が予定されている阪神なんば線の見学会を兼ねました総会・懇親会を実施いたしましたので、機会があればご報告したいと考えております。

今年度も残り少なくなりましたが、今後とも、会員の皆様のご要望等を十分拝聴しながら、大阪支部ひいては構築会の一層の発展に、微力ながら精一杯努力して参りたいと存じますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

支 部 長 綿 谷 茂 則 (C73)

副支部長 沢 田 隆 志 (A72)

中 平 明 憲 (C77)

監 事 和 田 雅 洋 (A77)

榎 原 範 明 (C78)

幹 事 長 山 口 博 章 (C81)

【愛知支部たより】

【中部支東】

愛知支部は、東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県に在住もしくは勤務している会員で構成しています。東海三県での近況をお知らせします。

・愛知支部総会を開催しました。

2008年3月7日愛知支部総会を開催しました。総会では、26名の方に参加していただきました。連絡先の判明している会員数は164名ですので、参加率16%です。

会計報告、事業報告の総会に引き続き、株式会社日建設計 林 和久さん[A73]にご講演を、そしてハタ コンサルタント株式会社の降旗 達生[C83]がお話をさせていただきました。林さんには都市開発から建築物まで幅広い見識から、降旗は13年間の独立起業経験から建設業界への思いと現状を、それぞれお伝えいただきました。

総会、講演後の懇親会では、常連メンバーに加えて、今回はいつになく多数参加いただいた初参加者を交えてにぎやかにすごしました。恒例の近況報告では、会員の皆さんのが日本の建設業界の中心となって活躍されている様子が紹介されました。ちなみに、最も卒業年度の古い参加者は、佐伯幸生さん[C57]、最も卒業年度の新しい参加者は野田 哲貴さん[C2002]で、実に45年の差がありました。

次回総会は、2009年3月6日を予定しています。多くの方のご参加をお待ちしています。

・中部の建設投資

中部地方は、トヨタ自動車をはじめとする製造業が盛んな土地柄（平成16年人口一人当たり製造品出荷額 中部4,256千円、関東1,961千円、関西2,199千円）のため、建設投資も工場建設、工場従業員等のための住宅投資が多くなっています。宅地建物取引物件数も、平成13年度6万件から平成18年度8.9万件と急増しており、建設需要を刺激しています。

港湾関係を見てみると、名古屋港は日本一の輸出額（全国の17%）で、三河港、清水港、四日市港を含めた中部主要港で全国の29.2%を占めます。

旺盛な建設需要に合わせて中部に来られることが多くなると思います。その際は、ぜひとも構築会愛知支部にもお声掛けください。

今年度の愛知支部役員は以下のとおりです。

支 部 長 矢 野 修 一 (C74)

副支 部 長 青 木 伸 一 (C81)

顧 問 今 倉 邦 彦 (A57)

森 下 弘 士 (C58)

監 事 格 清 哲 夫 (A72)

幹 事 長 降 旗 達 生 (C83)

【幹事長 降旗 達生 (C83) 記】



【東京支部たより】

東京支部では、平成 20 年 7 月 25 日に、第 22 回支部総会・懇親会を開催しました。総会においては、来賓として構築会本部から福田構築会長、大学から鎌田先生、多田先生にお忙しいスケジュールの合間を縫ってご参加いただき、原田修様（C50）の乾杯で、約 75 名の支部会員とともに懇親を深めることができました。

また、総会に先立ち、土木からは鎌田先生に、建築からは春田様（A70）と平原様（A79）に講演を頂きました。鎌田先生の“叩く”ことに着目した非破壊検査法についての講演内容は非常に実務的で明日からの業務に活かせるように感じました。また、春田様と平原様の講演は、官と民のそれぞれの立場から建築における PFI 事業についての内容であり、われわれにとって興味深く刺激になったと思います。

総会では平成 19 年度の活動報告および会計報告と平成 20 年度の活動計画が承認されました。また、役員人事については、次期幹事長として山本和伸様（A84）が指名されました。なお、その他役員についても若干の交代があり、平成 20 年度は以下の役員で活動を行っています。

支 部 長	上 阪 恒 雄 (C70)
副支部長	高 井 正 行 (A77)
監 事	新 村 洋 行 (A81)
幹 事 長	高 久 雅 喜 (C84)
幹 事	河 野 貞 男 (C77) 谷 村 幸 裕 (C87)
	浜 井 邦 彦 (C82) 竹 内 一 郎 (A91)
	鬼 丸 貞 友 (A82) 橋 口 也 人 (C92)
	大 田 哲 也 (C83) 下 野 正 人 (C93)
	佐 脇 宗 生 (A82) 野 呂 好 幸 (C93)
	福 岡 篤 信 (C84) 澤 井 一 善 (C93)
	山 本 和 伸 (A84) 山 下 直 紀 (A05)
	町 田 博 紀 (C86)

【幹事長 高久 雅喜 (C84) 記】



懇親会での記念撮影



講演会の様子

【兵庫支部たより】

【ひょうご支部見聞録】

兵庫支部では、見学会と講演会の2回の行事を毎年行っています。平成20年度の活動として、8月5日に総会と見学会を開催しましたので、紹介させていただきます。

今年の見学会は、土木・建築の歴史を学ぼうと、近代化遺産の2ヶ所を選び、あわせて工事現場1ヶ所の計3ヶ所を視察先のご協力を得て、見学させていただきました。真夏の炎天下の中、42名の会員が参加し、開催いたしました。

最初は、兵庫県西宮市の武庫川学院にある「甲子園会館」を訪ねました。ここは、フランク・ロイド・ライト（米・1869～1959）の愛弟子 遠藤新（1889～1951）の設計により、昭和5（1930）年に甲子園ホテルとして竣工した近代建築で、昭和40（1965）年より武庫川学院の所有として保存され、現在は武庫川女子大学の建築学科の学舎として利用されています。独創的な名建築で、ホールの光天井や細かな細工など、参加者は興味深く見入っていました。

続いて甲子園会館のすぐ近くにある橋梁「武庫大橋」に行きました。武庫大橋は尼崎・西宮市境の武庫川に架かる国道2号線の道路橋（当初は鉄道・道路併用橋）で、設計は当代有数の橋の技術者であった増田淳（1883～1947）です。竣工は大正15（1926）年で、供用当時最大級（6連）のRC開腹アーチ橋で、開腹部はアーケード状で装飾的なバルコニーを有しています。平成7年（1995）の阪神・淡路大震災では、関東大震災の教訓から耐震性に配慮した設計により、欄干の一部損傷に留まり、今なお重厚で優美な景観を見せていました。

最後は、都市計画道路 山手幹線の芦屋川地下横断の現場を視察させていただきました。生活の利便性や交通の安全性向上に加え、災害時における防災機能が期待されている道路で、住宅密集地区でのトンネル工事のご苦労を伺いました。

見学会の後は、構築会の福田会長と大学より建築工学部門長の多田先生、社会基盤工学部門の西田先生をお迎えし、灘の酒蔵「酒心館」で、総会と懇親会を盛大に行いました。見学会で汗を流した身体にいただくビールや日本酒は格別の美味しさで、参加した会員の親睦が図られたと思っています。

11月には講演会を開催する予定で、このような多彩な催しを通じ、会員間の交流と情報交換の場を提供していければと考えています。

支 部 長	志 波 秀 明 (C71)
副支部長	中 山 久 憲 (C73)
監 事	本 井 敏 雄 (C75)
顧 問	松 浦 勢 一 (C53)
	木 村 公 之 (A59)
	神 田 徹 (C63)
	岸 田 威 (C66)
佐 俣 千 載	(C71)
相 談 役	長 尾 直 治 (A69)
	道 奥 康 治 (C77)
幹 事 長	岩 橋 哲哉 (C81)
田 中 均 一 (A76)	
王 柏 群 (A54)	
入 江 恭 一 (A62)	
明 渡 稔 輔 (C65)	
西 田 泰 晴 (A68)	
橋 本 彰 (A72)	
川 谷 充 郎 (C72)	

【幹事長 岩橋 哲哉 (C81) 記】



甲子園会館（旧甲子園ホテル）
建設の歴史や意匠の説明を受ける参加者



武庫川にかかる武庫大橋（昭和2年完成）
重厚な姿を見せるRC開腹アーチ橋

【広島支部たより】

平成19年度は9月に開催された土木学会全国大会に合わせ、構築会の同窓会を開催しました。出口先生の乾杯の御発声で始まった懇親会では、久々の再会を喜び、学生時代を思い返したりしながら、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

また、恒例の現場見学会として3月に広島市内のランドマークである基町クレドビル内に設置された制振装置を訪問しました。この制振装置はビルが受ける横風に対する振動を抑制するために、最上階に設けられています。横揺れに対してのみ働く1方向のアクティブダンパーで2段振り子式になっており、ビルに対して約1/1000の重量の振動体を持っています。普段は目に入らないビルのインフラ、その一部としての制振装置の役割を学ぶことができました。

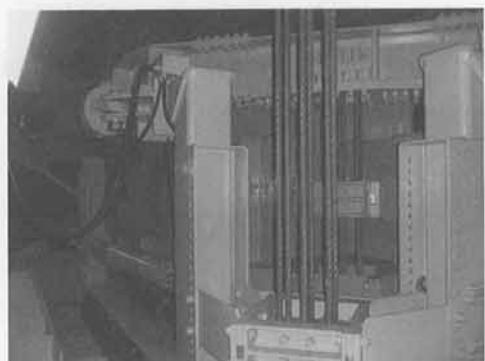
御家族同伴で見学会に参加された方もおられ、ビル屋上からの市街眺望の堪能や練習中の広島カープへの声援など、大変有意義な見学会でした。

平成20年度は支部発足から10周年ということもあり、7月に総会を開いて支部の活動についてPRを行いました。また現場見学会としては、広島工業大学の新講義棟建築現場見学会の開催を企画しておりますので、改めてご案内致します。

最後になりましたが、他地区より広島地区に転入された方がおられましたら、広島支部役員までご連絡頂けますようお願い致します。



基町クレドビル
全景写真



最上階内部

制振装置

【りえ次郎支倉兵】

支 部 長 坂 手 道 明 (C71)

副支 部 長 芥 川 省 三 (C74)

幹 事 長 増 田 伊知郎 (C80)

監 事 島 田 伸 彦 (C74)

幹 事 蒲 原 幹 生 (C87)

幹 事 小 西 英 明 (C95)

幹 事 南 博 高 (C95)

幹 事 下 村 和 也 (C97)

久 保 充 司 (C98)

【幹事長 増田 伊知郎 (C80) 記】



(長子市周子早川) 総会場千甲
源助等が最も興味深く到着する実験の機会

構築会会則

平成 17 年 4 月 1 日改正

総 則

会員・会員登録

- 第 1 条 この会は構築会という。
- 第 2 条 この会は会員の親睦を計ることを目的とする。
- 第 3 条 この会は事務局を大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻のうち、社会基盤工学コースあるいは建築工学コースのいずれかに置く。
- 第 4 条 必要なときは役員会の議決によりこの会の地区支部、職場部会を設けることができる。

会 員

- 第 5 条 この会の会員は
- (1) 大阪大学工学部構築工学科、土木工学科、建築工学科、地球総合工学科の土木工学科目、社会基盤工学科目ならびに建築工学科目の卒業生、学生
 - (2) 大阪大学大学院工学研究科構築工学専攻、土木工学専攻ならびに建築工学専攻、旧 地球総合工学専攻の地球保全総合工学領域および地域文化デザイン工学領域、地球 総合工学専攻社会基盤工学コースならびに建築工学コースの卒業生、学生
 - (3) (1) (2) に対し、教育および指導を行った旧教官、旧教員、現教員および役員会の 議決によって入会を認められた者とする。

- 第 6 条 この会の会員に次の 3 つの種別を設ける。

- (1) 正会員：卒業生、教員。
- (2) 特別会員：名誉教授、元教官、非常勤講師、元非常勤講師および役員会の議決よって入会を認められた者。
- (3) 学生会員：学部学生および上 1 号に該当しない大学院生。

役 員

- 第 7 条 この会に会長 1 名、副会長 1 名、幹事長 1 名、監事 2 名、委員若干名、幹事若干名の役員を置く。
- 会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐し職務を代行する。
- 幹事長は会長を補佐し幹事団を総理する。監事はこの会の会計を監査する。
- 委員は会務を評議する。幹事は会務を処理する。

- 第 8 条 会長および副会長は正会員の中より役員が推薦する。
- 幹事長は地球総合工学専攻社会基盤工学コースおよび建築工学コースの教授、准教授、講師のうちから互選する。委員は各卒業年次から 2 名ずつ、各支部から 1 名ずつ互選する。
- 監事は委員のうちから互選する。幹事は地球総合工学専攻社会基盤工学コースおよび建 築工学コースの教員から選出する。

- 第 9 条 役員の任期は 1 年とする。ただし再任を妨げない。

規則会議

役員会・総会

第 10 条 役員会は会長、副会長、幹事長、委員および幹事によって構成され、年 1 回これを聞く。

但し、会長が必要と認めたときは隨時これを召集することができる。

第 11 条 会長は必要に応じて総会を開く。

会 計

第 12 条 この会の費用は会費および寄付金その他をあてる。会費の変更は役員会の議決によってこれを定める。

第 13 条 会費は 1 ケ年、正会員 3,000 円とする。ただし、他大学を含めた大学院在学中の正会員は半額とする。

また、卒業 45 周年を迎えた会員は、会費を滞納していない限り卒業 46 年目以降の会費を免除する。

第 14 条 この会の会計は監事が監査し、その承認をえて役員会でこれを報告する。

事 業

第 15 条 幹事団は次の各号の事業を行う。

- (1) 会員名簿の刊行と配布。
- (2) 講演会、見学会などの開催。
- (3) その他の行事。

第 16 条 会員が叙位、叙勲などの栄に浴した場合、会長より祝電を打つことができる。

第 17 条 会員が弔事の際は、次の各号による。

- (1) 正会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、楓または盛花一対を呈する。
- (2) 特別会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、楓または盛花一対を呈することができる。
- (3) 学生会員が逝去の場合は会長より弔電を打つことができる。

会則の変更

第 3 条 この会の会則の変更は役員会の議決によってこれを定め会員へ報告する。

付 則 この会則は平成 17 年 4 月 1 日より実施する。

(会員登録用) 電子商取引会員登録

会員登録用	会員登録用	会員登録用	会員登録用	会員登録用	会員登録用
020.03.000	000.200	020.100	000.000	020.000	000.000
020.03.081	000.201	020.101	000.001	020.001	000.001
020.03.118	000.202	020.102	000.002	020.002	000.002
020.03.15	000.203	020.103	000.003	020.003	000.003
020.03.1915	000.204	020.104	000.004	020.004	000.004
020.03.198	000.205	020.105	000.005	020.005	000.005
020.03.19	000.206	020.106	000.006	020.006	000.006
020.03.19	000.207	020.107	000.007	020.007	000.007
020.03.00	000.208	020.108	000.008	020.008	000.008
020.03.04	000.209	020.109	000.009	020.009	000.009
020.03.04	000.210	020.110	000.010	020.010	000.010
020.03.04	000.211	020.111	000.011	020.011	000.011
020.03.04	000.212	020.112	000.012	020.012	000.012

会員名簿

KOUCHIKU-KAI

会員登録用

会員登録用

構築会会員数現状況 (2008. 11. 1 現在)

会員種別	内訳	土木 社会基盤	建築	合計
正会員	学部卒業	1,939	2,000	3,939
	修士課程・博士前期課程修了生	143	130	273
	博士課程・博士後期課程修了生	62	54	116
	現教員	5	7	12
小計		2,149	2,191	4,340
特別会員		66	70	136
学生会員	博士後期課程	6	9	15
	博士前期課程	7	9	16
	学部4年	50	49	99
	3年	43	44	87
	2年	37	40	77
小計		143	151	294
合計		2,358	2,412	4,770

注) 会員数は物故者を除く。

逝去者報告

2007年11月～2008年10月に、下記の方が逝去されたとのご連絡が本会にございました。
謹んでお知らせいたします。

黒羽啓明 (A54)

小泉登 (C76)

西本祐司 (C76)